

---

# **最強彼女**

草薙若葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最強彼女

### 【NZコード】

N3164K

### 【作者名】

草薙若葉

### 【あらすじ】

平凡でなんにも取り柄がない地味な僕の彼女は、学校一の美女。でもその彼女は、超がつくほどの二重人格で・・・。

アドバイス、感想、指摘をいただければとても嬉しいです。

## 弱い僕と強い彼女。

僕は、  
西山和也。  
にしやまかずや

中2。

7月7日生まれ。

蟹座。

A型。

見た目は、何処にでもいる中学生を思い浮かべてくれれば、84%の確率で僕（多分ね）。

性格は、ちょっと消極的。

学力は、中の下。

帰宅部。

好きなものは、ハンバーグで、

嫌いなものは、特に無し。

みんなには、カズつて呼ばれてる。

（僕の紹介はココで終わろう。）

そんな僕には、彼女がいる。

ほら、あそこで男子と話してる女の子。

あれが、かるやまだみか軽山田美夏。

同じ中2

8月15日生まれ。

獅子座。

B型。

見た目は、めっちゃ可愛い。多分、学校一。アイドル顔負け。

性格を語るには、多分、一時間は要する。

まあ、はしょって言いつと一重人格。

学校では、温厚篤実、傾国美女、才色兼備とも言いましょうか。  
とにかく可憐。

でも、僕の前では『最強彼女』。

蹴る、殴る、そして十字固めまで使つてくる。

でも、周りの人と言つても信じてくれない。

だって、いつもはすつごっこブロック『してくるから。

それに気づかないのは、男子ばかりでなく女子もだ。

みんな、彼女が一重人格なんて夢にもみてないみたいだ。

その上、賢いから先生からも信用されてる。

成績は、上の上（オール5）。

これも多分、学校一。

華道部、書道部、調理部の三叉。

そして、クラス委員をしている上に、生徒会長。

本人曰く、すべて信用されるためだそうだ（や」までもやるか・・・?  
?フツー）。

趣味は、表向きは、読書に華道に書道にお菓子作り。

裏は、柔道に空手にラグビー、そしてボクシング＆プロレス観戦（  
これは誰にも内緒）。

家は、お母さんがどつかの会社の秘書。お父さんは、某大手会社の  
社長さんだ。

（家に行つたときマジビビった。）

僕が知っているのは、これくらい。

ついでに言つとくけど、僕と彼女が付き合つてゐるのも内緒だ。

だって、そんなこと知られたら、彼女のファンクラブの部員に殺されるからね。

## あの日の出来事。

出逢ったのは、今から4ヶ月前の6月だ。

その日は学校帰りに突然、大雨が降って、僕は仕方なく近くの建物に、雨やどりしていた。

だが、厚い雲は去る気配もなく、果てしなくどりまでも、広がっている。

雨は、いつまでたっても降り止まない。

雨の口は嫌いなんだ。

良い事なんてあつたことがない。

天気予報は外れるし・・・傘を持っていくのは忘れるし。

僕は、憂鬱と苛立ちを胸に抱えて、雨が降り止むのを、ただ待つ。

「あれ？西山・・・君？」

女の子のきれいで澄んだ声がした。

顔をあげる。

そこには、軽井田美夏の顔があった。

あこも変わらず、今日もきれいだ。

「雨やどり？」

「う、うん」

僕は、一度も話したことがないので、戸惑いながら頷く。

軽山田さんは、いつも友だちに囲まれている。

その点、僕は一人、はやく休み時間が終わると願いながら、机に顔を伏せるているだけだ。

こんなカタチで、喋ることになるとは……。

「傘、いる？」

軽山田さんは、少し微笑みながら、鞄から水色の傘出した。

僕は、コクンと頭を下げる。

胸がドキンドキンと高鳴り、今にも破裂しそうだ。

「どうぞ」

「あ、あり……が……と……」

僕は、必死に言葉を紡ぎながら、傘を受け取った。

「そんなに、緊張しなくていいよ~」

彼女は、あははっと可愛らしく笑つた。

「あれ？ やんだ？」

彼女は、瞬きして、空を見上げる。

空は、二つの間にか、青く澄み渡つていて、虹が架かっていた。

「うわー！見て見てー！きれーーー！」

彼女が、虹色の橋を指す。

このあと、衝撃的な事実を知ることになると、思いもしなかった。

## 暴力的な彼女と可憐な彼女。

「西山君……つてや」

彼女が、口を開いた。

僕らは今、帰り道の途中だ。

しらなかつたのだが、帰り道が同じらしい。

「？」

「一人で居るの……好きなの？」

「え？ う、ううん！ 別に好きなわけじゃない……ですよ？」

好きなわけない。

休み時間が一番つらい。

ひとりぼっちで、友だちという友だちも居なくつて……。

ほしいっていつも、もうグループは完全に出来ちゃって、入るに入れないし。

大体、僕は自分から人に話しかけるタイプじゃないし……。

だから、あきらめてるけど、心の奥深くのどこかで『誰かが話しへ来てくれば』って思ってるんだ。

だから、机に伏せて待つてるんだ。

「あははっ、何で敬語？！」

彼女がかわいらしく笑う。

「いや・・・まあ・・・」

特に理由はなかつたのだが・・・。

「ねえ、彼女お」

ビーハからか甘つたるいにおいとともに男の声が聞こえた。

声がした方向を見る。

そこには、金色に染めたきらびやか（？）な髪、鼻ピアス、剃つて  
なくなつている眉毛、

まあ・・・チヤラ男って言つたら

分かつてもうらえるだらう。

チヤラ男がはなしかけてきた。

つれつたいほビの甘つたるい声で。

ナンパか？

まあ、彼女程きれいだったらされるわな。

「なんですか」

さ、たすが、ナンパされなれてる？！

「そんな冴えない男と歩いてねえで、俺と歩かねえ？－りんなと－、つれつてあげるからよお」

冴えない男で、悪かったな（怒）

「結構です」

れ、冷静だな。

戸惑いもせず、彼女は凛と立ち、冷静で、僕は彼女を美しいと思つた。

いや、顔も美しいんだけどさ、なんていうんだろう・・・まあ、直感かな（笑）。

「そーいわずにさあ

チャラ男が、しつこく誘つ。

「行こう、カズ」

え？カズ？！

そう思つのもつかの間、僕は彼女に腕を引っ張られた。

ずんずんと大股で進んでく彼女。

「ちよ、まてよ。人の話聞こーよ」

人の話聞一てねえのはてめえだよ、チャラ男。

チャラ男が、ポンと彼女の肩をつかんだ。

「・・・めい」

どこからか、低い声がした。

「へ？」

まるで、地獄から這い上がつて来たような・・・ぞくつとする声だ。

「やめやつてるやうつ……」

彼女は、チャラ男の腹を蹴った。

ナイス！彼女。

・・・じゃなくて。

ええ？？？！――！

あの軽山田さんが――？

つてか、関西弁！？

チャラ男も、つづくまり腹を抱え、あり得ないといつ風に、立つて  
いる彼女を見上げた。

「ハハとこんじや、ウチをナンパしちゃひなんて、百年はやいわ！…」

彼女が、つづくまつてゐるチャラ男の背中を勢いよく踏んづけた。

うめくチャラ男。

最終的には、「すみません！すみません！もつしませんから…。  
！…！…！」

ヒトト座して謝る始末。

・・・なんか、チャラ男がかわいそくなつて來たよ・・・。

「ホンマやな？」

「はい、

彼女が、やつと蹴ののをやめた。

チャラ男が、すたこりかつと逃げて行く。

あばよ・・・チャラ男・・・。

「ばーか」

彼女が僕の方を向く。

そして、田を剥いた。

顔色がどんどん青くなつていぐ。

気づいてなかつたんだ・・・僕の事。

「あはは・・・」

笑うしかなかつた。

「JRのことせ、ぜえつたい・・・内緒やで」

うなずく僕。

「ぱりしたりぱりなるかわかつてゐやうなあ？」

僕は口も言わはず、何回もつなづくしかなかつた。

だつとうなづかなかつたら殺されやうだよ・・・。

（）僕の立場になつてたつて見たら分かると思つ。

いきた心地しないよ？



## 僕と彼女の関係。

「最近、お前美夏ちゃんと仲良くな?

小学生の頃、友だちだつた（しかも高校に入るまでずっと一緒にいた）  
ラスだった（みかやまけいたるう）甕山慶太郎が  
数年ぶりに話しかけてきた。

慶太郎は、一言でいえば人懐っこくて可愛い。

例えると、そり・・・まるで、犬みたいだ。

誰にでも、愛想を振りまく。

もつとほかの理由があつたせいか、

だが、高校に入るとクラスが違つたせいか、友達が多くなつたせいか、

分からぬけれど、一言も言葉を交わしていない。

あ、でも一回あった。

中一時の給食時間。

「コロッケ、俺にくれ」

「い、いこよ、あげる・・・」

本当は食べたかったのに、あげたことを、そのあとすこし後悔した。

ついでに、言ひとくが、慶太郎は『彼女』のファンクラブの部長である。

彼女の素顔が、ああだと知つたら失神するくらい驚くのだろうか？

僕は、少し思つた。

「い、いやそんなことないよ」

「そんなこと、あるだろ。俺、知つてんだからな。昼休み、美夏ちゃん」と話したこと

「いや、話してたつていうか・・・脅され・・・」

そう、毎田毎田『のこと』を言ひてないか確かめられるのだ（拷問に近いやつ方で）。

「？」

僕は、あわてて手で口をふさいだ。

彼女が、じつちを睨んでいるのが、わかつたからだ（地獄耳か？）。

「どーした」

慶太郎が、訝しげに僕を見る。

「ううん、なんでも」

「とにかく！！」

慶太郎が、僕の机をバンッと叩いた。

その音で、周りの視線が集まる。

「今後もそういう、行動がみられるなら学年中でお前をハブること  
だって、俺には簡単にできるんだからな！」

僕は、いつもと違つ慶太郎にビクつきながらうなづく。

「よしぃ」

慶太郎は満足したらしく、いつもの笑みで自分の組へ帰つて行った。

つていうか、今田の件について昼休みに、こつてりと彼女にしぼら  
れることだらう。

それは、みんなにハブられるより、僕にとつては怖いことだった（  
いつも、ひとりぼっちだし）。



## 彼女の嘘泣き。

「痛い…」

僕は今、屋上にいる。

そして、ことあるごと十子固めまでされてる。

だんだん、ひどくなってる気がする。

一田田（あの事件から数えて）は、ナラレながら質問されて、

一田田は、雑巾じぼり（手を雑巾みたいに絞りられる）こと

三田田は、雨が降つてる中、盆踊りで

四田田は、（二田田で『踊り』でハマったのか）デジタルかへこ

そして今日元気。

思ひ返してみれば、ホント理不尽だな、僕。

でも十字固めって……。

そのうひ、背負い投げされたり、関節外されたりするんじゃないかな  
心配になってきたよ……。

ガチャツ

扉があく音がした。

「な、なにしてんだよつー！」

聞いたことのある声。

た、たすけてくれ……。

そして、暴行罪で訴えてくれ……！

ホント死ぬつてば！

「カズ！お前、美夏ちゃんに……！」

え？！僕かよ？！

訴えられるの僕？！

でも、はたからみれば技をかけているのがこいつだってわかるはず。  
・・なんだが、

慶太郎は、違うとり方をしたみたいだった。

「お、おまえ、美夏ちゃんに変なことしちだろつー！」

してねえよーーー！

つていうか、するかーーー！

そんな」としたら殺されるつつのー！

慶太郎が、わなわなと唇を震わせる。

「ち、ちが」

僕が反論するが、慶太郎は聞く耳をもたない。

「よ・・・かった」

彼女は、あたかも僕に変なことをされて怖かったかのように肩を震わせて泣いた。

慶太郎は、彼女の小さな肩をさりげなく抱いた。

おい、慶太郎。

鼻の下、のびてんぞ。

「こんなことされて・・・髪の毛もぼさぼさじゃないか・・・かわいそうに」

それは、僕に十字固めをしたからです。

「おまえなー!こんな」として許されると思つたな!!--暴行罪で訴えてやる!!



## 僕への疑い、慶太郎との絶交。

慶太郎は、僕が彼女を押し倒して、彼女が嫌がって十字固めをした  
と思っているらしい。

押し倒されたんなら、突きはなしたり、もがいたりはしても、十字  
固めはせんだろ・・・。

「ち、ちがうんだよ」

「なにがっ」

「僕はなんにもしてないってばっ」

「嘘つけ!」

慶太郎・・・お前ホント僕のこと信用してないな・・・。

「けいたろ・・・くん」

彼女が弱々しく口を開いた。

今度は何を言つつもりだ・・・?

「西山くんは悪くないの・・・訴えないであげて」

僕は内心びっくりした。

彼女が、僕をかばってくれるなんて思いもしなかつたんだ。

まあ、彼女がまねいた事なんだけれども……。

不覚なことに、胸が熱くなつた。

「私が……」

彼女の目からまたほろほろと涙が落ちた。

それは、とても嘘泣きと思えないくらいぐらぐら。

「美夏ちゃん……こんな男のことで泣いてやるなー…

こんな男って……。

僕なんにもしてねえのに……。

「カズ……」

僕は、慶太郎の目を何故か真っ直ぐに見れずつむいた。

これじゃ、僕が本当にやつたみたいじゃん……。

「今日から、もう絶交だ！――！」

「…………」

僕がやつたんじゃねえのに…………。

## 彼女の看病

おやるおやる、教室に入った僕は、思わず胸を撫で下ろした。

そこには、いつも通りの風景がひろがっていた。

だが、どこか、わびしい感じがする。

なにか、物足りない気がするのだ。

クラスメイトの声がした。

「美夏ちゃん、どうしたんだろう」

「風邪だつてきいたけど」

「マジで? 大丈夫かなあ」

風邪?!

あいつが?!

昨日まで元気だったのに。

看病に行こうかな・・・。

いや、いや。

僕は慌てて首をふった。

# 何で僕がつ！！

つてか、僕そんな答えに至るんだ？！

あ  
い  
つ  
な  
ん  
か  
・  
・  
・  
・  
・

僕は、あいつの悪行を思い出してみた。

それに数えきれないほどあつた

九六

僕は慌てて前を見た

そこには慶太郎が仁王立ちしていた

たに

お前 美夏ちゃんの看病に行くなよ!!!

しかねえよ!! んなの」

いや、しんじらんねえな。たゞでお前美夏ちゃんの事好きだ？」「

たる。」

「おはなあ、それがたと思つたが

慶太郎が鼻をフフンと鳴らした。

「ちがつーーー！」

「ま、覚悟しとナ」

違つつてば、何で僕がアイツのこと・・・。

## 彼女に貸したDVD。

今、僕は自分の部屋にこもっている。

そして、あることに気づいた。

「あ、あいつにレンタルDVD返してもうわなきゃ

そう、彼女に貸したのだ、DVDを。

え？ DVDの内容？

めっちゃ、ビューティフルしたサスペンスドラマのDVD。（彼女にわく、なんかどきどき感が好きらしい）

いや、いや。僕がT-SUTAYAに借りたんじゃないよ？！

母さんのだから……

実は、こつそり見るとかはないからね？？？？！！！

今日締め切りなんだから、返してもらわなきゃ母さんに殺される。

彼女の家に行かなきゃ……

僕は、立ち上がった。

あ、そうだ。

僕、彼女の家しらないじやん。

つてか、彼女風邪引いてるじやん。

・・・・殺されるじやん。

やばくね？

僕、死ぬんじやね？

## 彼女の家は白壁の豪邸。

「なんじゅ」「りゅああああ

僕は、彼女の家の前に立っている。

田の前に広がるのは、視界に入りきれない程の豪邸。

僕は、開いた口が塞がらない。

これが、あいつの家？！

ありえねえ！！

僕は、彼女の家を知ってる人に書いてもらつた紙に田を落とす。

間違いない、この家だ。

でも納得いく氣もする。

あの、（歯でこむときの）品の良さ、立ち屈振る舞い。

あれだけ強いのも、自分を護るために、誰かから畠つたのだらう。

「あの・・・」

振り向くと、白いヒゲを生やした初老の男が立っていた。

「どうやら様で？」

「あ、えっと、西山和也です」

「ああ、和也君だね！美夏お嬢様から、お聞きしておつますよ」

「はあ・・・」

「お嬢様の、初めて出来た友だちだつて、二つも・・・」

初めて出来た友だち・・・？

彼女には、たくさん友だちがいるのに・・・？

「じこーーー！」

声がした方を見る。

そこには、ネグリジエを着た彼女が居た。

「何してらつしゃこますか！…寝て居なことあれほど・・・」

「暇だから散歩しようと思つたの…いいでしょ、そんくらい

「いけませんよーまだ寝てて下さーーー！」

「やだよー

僕はある事に気づいた。

『じこ』の前では、ブリッピントンない。

家では、しないのかな。

まあ、そうだよな。

したら疲れるもんな。

「それと、じい」

「はい、なんで『せいましょうか』

「余計な事いわなくていいから！」

「・・・かしこまりました」

彼女が、僕の方に向いた。

「カズ、お見舞いに来たの？心配してくれたんだ？」

彼女が、にんまり笑う。

「ちげえええよーー！」

彼女の家は白壁の豪邸。（後書き）

## TSUTAYAでの出逢い。

「はあ・・・・・・・・」

帰り道、僕はうつむいた。

つかれた・・・。

精神的にも肉体的にも・・・。

あれから、なんとかDVDを返してもうって、（まだ、見ていたら  
しい）彼女のためにストレス発散機

（サンドバック）になつて・・・。

思い出しただけで疲れる・・・。

僕は、TSUTAYAへDVDを返しに行つた。

返し終わつて、帰ろうとする。

あ、またお母さんに借りてこいつていわたんだった。

僕は、思い出しそうなDVDが並んでいる棚を見上げた。

確か、次は恋愛ものの映画だったはず。

あつた。

棚に手を伸ばしてみると。

恋愛もののDVDを借りるのほ少し恥ずかしいが・・・。

借りようとカウンターまでこいつDVDを置いた。

「こりゃじゃ・・・あれ?」

「?」

早くしてくれよ、レジ（のお姉さん）・・・。

おなか空いたんだよ。

彼女のせいだ！

「もしかして、あなた・・・西口くん?」

## TSUTAYAでの出逢い。（後書き）

どうも！！

普段あとがきを書かない私が何故書いたのか・・・  
気になりませんか？

え？ならない？

・・・（無視）

なぜなら！！

最強彼女のオリジナルキャラクターを作つて欲しいのです！  
よっぽどひどくなれば物語に出てくるはずです・・・たぶんね、  
保証はしません。

ということで、絵とかつけてくれたら嬉しいですけど、名前＆設定  
でいいので（あと、主人公、美夏との関係などなど）  
お願いします。

あ、いい忘れましたがメッセージで送つて下さい。  
それでは～。

## アルバイト禁止。

「山ノ内……さん？」

「やーだよーー。」

山ノ内さんは、嬉しそうに笑つた。

レジの人は クラスマイトの山ノ内翔子だったのだ。

山ノ内は、あいつの一一番田にモテてる……らしい。

放課後の教室で誰かが（男子）話しているのを聞いたことがある。

でも・・・

「いひの学校、アルバイト禁止じやなかつたつけ？」

「・・・・・まあ」

山ノ内さんは、氣まずそつに田をさらした。

「内緒にして？お願い！！」

「いいけど・・・」

後ろを振り向く。

「後ろ並んでるから早くしてくれるかな

「お、いるな、いるな」

誰かプリーズヘルプミー。

「おひはよー」

教室に入つて、まず声をかけて来たのが、彼女だった。

変わらない日常。

「ああ、おはよ」

「西山くーん」

ゲツ。

甘い声とともに、あいつが僕の体に後ろから飛びつく。

そり、山ノ内翔子。

「昨日は楽しかったね。またきてね」

山ノ内さんが、満面の笑みで（後ろにいるからみえないけど）笑つたような気がした。

彼女の頬がぴくっと引きつるのが分かった。

彼女が切れたときのサインだ。

ヤバい！！

そう思つた瞬間、彼女は鬼の形相になつていた。

「西山ああああああああああああああ

僕かよつ！－！

山ノ内せんじやねえのかよつ！－！

山ノ内せんじやねえのはなれだ。すつと僕からはなれた。

僕を見捨てるなあああ！－！

逃げよつとしたが、彼女に一の腕をつかまれる。

「てめえええええ、昨日あいつと向したんだあああああ

「何にもしてないつてばあつ

「嘘つけえ

辺りは、しんとなつて彼女と僕だけを凝視していた。

「嘘じやねええええってば

「ひむかひじやひじ、ひじじひじも向もあるかつ

し、ひじじじじも向もあるかつ

何もしてねえんだからー。

僕は、後ろから首を絞められる。

く、くるしい！

必死にもがくが、彼女の手は決して離れる事はない。

僕は目を白黒させた。

つていうか、これ殺人じゃねえ？

どんどん強くなつて行く首を絞める力。

がらりと、扉の開く音がした。

先生が入つてくる。

先生は僕たちを見て、目を見開く。

そして、すつと青ざめた。

h - h e l p m e ..... (た、助けて・・・)

僕は、目の前が真っ暗になつた。

これ死んだんじゃね？

この物語もつ終わりなのか・・・？

僕・・・死ぬのか・・・？



「ここは冥土？！先生は天使？！」

ゆっくり目を開ける。

僕はベッドに寝かされていた。

消毒液のキツいにおいが、鼻を刺める。

白い天井・・・

―――ここは・・・？

起き上がってみる。

首がじんじん痛んだ。

その痛みで、記憶がよみがえる。

一彼女に首を絞められたんだった・・・。

どうやら、ここは保健室のようだ。

よかつた・・・と思わせてもしかして、ここ冥土だったりして・・・。  
なんてね。

「おきた？」

今まで何かを書いていた保健の富部智美先生が振り向く。

「おきまし・・・つて先生！？そのカツ」「・・・」

なんと、先生は天使の格好をしていたのだ、白衣じゃなくて。

「これ？これねー」

「もしかして先生天使なんですか？！！」

「は？」

先生がぽかんと口を開ける。

先生の頭の上で揺れる輪っか（？）。

「僕死んだんすか？！」

「えっとね・・・」

先生（天使）は、言いにくそうに目を伏せてごぶしを額に当てる。

やつぱり！

僕殺されたんだ？！！

「うう、どこなんすか？！天国？地獄？」

僕が先生にすがりつく。

「えっと、ちがうのよ」

「へ？」

今度は、僕がぽかんと口を開けた。

「これ『コスプレ』なのよね～」

「『コスプレ』…？」

「潤ちぢゅ…・田山先生にもらって…ね、試着してたところのよ。それで田山君が起きたってこと」

田山先生とは、ひいのクラスの担任—田山潤一である。

あの真面目で硬派な田山先生が！？

そう、田山先生の授業中、しゃべつたら実験のモルモットにされるつていうくらいの噂が流れているくらい。（オーバーすぎだろ）

笑顔なんか見た事がない。

だが、そんな先生のファンは多い。

そして、面部先生も結構モテる。

先生自らでに休み時間、保健室に来る男子がいるつていうくらい。

女子にもトモちやんって呼ばれて親しまれている。

そんな先生が『コスプレ』…！」

つてか、田山先生が一番ありえねえ！！

そんな事を思つていると、扉が音を立てて開いた。

「トツモちゃん～」

「潤ちゃん」

二人は、僕の前で抱き合いやがった。

バカップルか？

僕は、心中で毒づいていると、田山先生が僕に気づいた。（今頃  
？！僕つてそんなに存在薄い？！）

「に、に、に、に、に、西山？！」

『に』が五つ多いよ・・・先生・・・はあ。

僕の両親は・・・。

「ええーっと、これはだな・・・深い理由があつてだな・・・」

深い理由ってなんだよ。

「先生・・・いいです。説明は」

「いや、でも誤解なんだぞ?！」

「大丈夫ですから、誤解してませんって」

先生は空咳して、メガネをかけ直した。

「とりあえず、保護者に連絡して・・・」

「先生」

富部先生が、田山先生の声を遮る。

「なんですか、富部先生」

「何度電話しても、つながらないんですよ」

それもそのはず、うちの親は一人揃つて秋葉原に行っているのだから・・・。

そう、秋葉原つていつたら、オタクの聖地。

「うちの親も、オタクなのだ。（一次元の方の）

家中には、フィギュアで埋め尽くされている。

そんな中でこんな平凡な僕が育つたのは奇跡だと思つ。

余談だが、めっちゃラブなのだ。

れつあまでの田山先生と畠部先生みたいに。

二人がつながっているのは、赤い糸じゃなくて、オタクの絆<sup>いと</sup>じゃないからおもうほど。

日が暮れたら早く帰りましょう。

「えっと、今日は両親帰つてこないので一人で帰ります」

「大丈夫なの？」

「はい」

「それなら仕方ないな、ほら」

先生が、僕の鞄を渡した。

「早く帰りなさい、日が暮れたら危ないからね」

「はい、絶対そんなこと思ってない」。

「だって、僕八時まで居残りさせられたことがあるもんね！」

宮部先生と、イチャイチャしたいだけなくせに。

まあ、お邪魔虫は退散するとしよう。

「じゃあ、さよならっす

お幸せに

「ああ」

「バイバイ」

富部先生の手とともに、頭の上の輪っかが揺れた。

## 治療費の代わりに？！

昇降口で靴を履いた。

空は、もう口が沈みかけていた。

校門へ向かう。

校門を通った時、

「力・・・・ズ」

と、鬱々とした声が聞こえた。

全身の毛が逆立つてしまつような。

辺りを見回す。

なんと校門の陰に彼女が隠れていた。（からうじて彼女と分かつた）

いや・・・彼女って言つてもいいのか・・・？

貞子の様に、黒くて長い髪を前に垂らして。

あ・・・もしかして。

「お前、僕を驚かそうとしてんだろ？そりはいくかー！」

そういうて僕は、彼女にパンチする真似をしてみる。

ああ、重症だ。」  
「…

いつも通りのあいつが僕に「お前」とていわれて黙っているわけがない。

「お～い、いきてるか～？」

僕は、顔の前に（髪の毛で隠れています）ひらひらと手を振つてみせた。

「あんたこそ……」

弱々しい声が返つてくる。

「僕はこの通りぴんぴんだぞ？」

「びっくつしたじや……んか……」

彼女が、僕の腹にパンチした。（こつもより弱々しいが）

それより……

「もしかして……心配してくれたの……？」

それはあつえねえよなあ。

僕が彼女の顔を覗き込む。

「違うもんー自意識過剰過ぎー。」

ハイ、スママセソ。

「……でも死んじゃうかと思った……氣絶するから……」

そりやあ、普通の人は、あれだけされたら氣絶せざるを得ないと思  
いますけど？

「まあな、僕も思ったよ、っていうか治療費ちうだい」

冗談半分で言つてみる。

「バーカ

バカってなんだよ？！

「まじいてえんだぞ？、この首の傷

「じゃあ……」

彼女が、僕の制服の袖を引っ張る。

――――？！――

バランスが崩れて、よろめく僕。

そこに、彼女の唇が頬にあたつた。（あたつたよりかすつたの方が  
正しいかな）

「なにすんだ……？！――

「治療費！！」

はあ？！！

つていうか僕のファーストキスがあああああああ（泣）

彼女は、少し顔を赤くして、走って家へ帰ってしまった。

僕は、赤くなるどころか青くなっていた。

ぼ、僕のファーストキス・・・もっとロマンティックなのを想像してた・・・のに。

イシャリョウカラリヤ・・・。

## 彼女の本当の性格

まだ、彼女の唇の感触が残っている——。

僕は、頬を触つてみた。

そして、ある疑問が浮びあがつた。

——彼女は僕の事が好きなのか——

・・・いや、ありえねえ、これだけは・・・

——でも、好きじゃないならなんで? なんでキスしたんだ? ——

考へても考へても、答えにたどり着けない。

むしろ、もつと分からなくなつて来ている気が・・・。

——でも、もし! もしだよ? ……彼女が僕を好きとして……  
僕は……彼女の事が好きか……? ——

いや、嫌いじゃない。

何か憎めない。

彼女が美人だからっていう問題じゃなくって……もつと違う問題で……。

それと、僕といふときだけに一瞬見せる哀しい顔を見ると、無理し

てるのかなって思つ。

そりや、暴力的な所も彼女の一面なのかもしれないが、彼女は僕の思つて いるより、

ずっとずっと弱くて 儒い人なのかなって思つ。

そんな顔を見ると護つてあげなきゃなって思つるのは思つただけど・。  
・。

## 山ノ内穂子のファンクラブ。

教室に入ると、「おはよー！」と、どざきつせんに山ノ内穂子の声が聞こえてくる。

それはこつもと変わらない。

でも・・・

「軽口田は？」

「あいづら～？知らない。登校拒否なんじやない？？」

「登校拒否？なんで？」

「ほひ～ダーリンが首縊められたんじやん？？そのあと、皆にひかれて先生にも怒られて、教室でしつけられたよ～」

そうか・・・そうだったな・・・。

皆にひかれたのか・・・。

前までは、卑くばれたり思つたのに・・・。

「ひ～、なにげにダーリンひよふなああああああああああ

「だつて、ダーリンでしょ？」

「こつ、お前の彼氏になつた！――？」

「なつてないけどお、ダーリン私の事好きでしょ？？私の事もハーテ呼んでいいよお」

絶対呼ぶもんか！！

山ノ内は、髪の毛をいじりながら言ひ。

その発言に周りは、ざよめいた。

「お前！翔子様の事を好きなのか？！」

僕の元へすがりついて来たのは、山ノ内のファンクラブの部員である。

「やめえええい」

教室中に響き渡る声を放つたのは、山ノ内のファンクラブ部長・南藤好男（なんとうよしお）である。

彼は、ナルシストな事で有名だ。

「でも…本当の事を確かめ……いて」

南藤はハリセンで部員達を叩いた。

「翔子様がたとえ彼氏ができたとしても…愛すと誓（み）ったのを忘れたのかああああーー！」

「忘れてません！」

「よし！それでこそ僕たんの部下だ！！」「

一人称僕たんって・・・。

つていうか熱いーな。<sup>あち</sup>

面倒くさそうだから、なるべく関わらない様にしておこう・・・。

僕はそつと離れようと後ろを向いた。

「西山和也！――」この僕たんが何度もアピールしても振り向かなかつた翔子様が振り向いた

つていうことはお前に何かあるつてことだ！！翔子様を大事にした  
まえよおおおおおおおおつおおおおお

声が震えている。

最終的には、号泣しやがった。

部員達もそれにつられて泣き出す。

ああ、なんでこんなのが同じクラスなんだ。



## 彼女の冷酷(?)な噂。

彼女は、昼休みに遅れて学校に来た。

いつもどおりの彼女。

髪の毛も、手入れされていて、さうさいだ。

目も腫れていなかつた。

だが、泣いているよ、寂しがつていて、見えたのは、僕だけだろうか？

彼女は、席につき文庫本の表紙を開いた。

そんな彼女に、冷酷な噂がのしかかる。

半分本当のことだけれども、半分嘘が混じっていた。

噂つてこうものは尾ひれがつくものだから。

例えば・・・・・そうだ。

こんなのがあつたな。

— 彼女は、サイボーグである。

ありえねえよ！……（つづりか、これ冷酷な噂じゃねえじやん…）

つていつか **皆は**<sup>バカなやつら</sup>、その噂を信じている。

でも、もしあいに『私つてサイボーグなんだ』って言われたら信じてしまうかもしない。

だって、めっちゃ強いから。

僕、死にかけたし。

つて、話がどんどん変な方へ行つてゐる気がする。

とりあえず、話を戻そう。

・・・で、なに話してたっけ？

・・・忘れたな。

ま、いつか。

とつあえず彼女と話してみよつ。

うん、そうじよつ。

## またチャラ男登場。

僕は、下校時間になつてもまだ話しかけられないまま、彼女を追いかけていた。

なんかストーカーみたいだけど・・・。

だが、彼女は気付かない。

ずっと、うつむいたまま歩いている。

通りすがつたチャラ男が彼女に声をかけた。（またチャラ男かよ！）

でも、今度はあるの雨の日のチャラ男じゃない。

つていうか、なんであいつけチャラ男によく話しかけられるのだろう？

僕が、他の人に話しかけられるのを見てないだけかな？

まあ、そんなことはどうでもいいや。

ここから（電信柱の陰）では聞こえないないので、代弁してみた。

『ねえねえ、彼女。どつかあそびにこーよ』

彼女が、顔を上げて笑う。

『いいよ』

手を絡めあう二人。

・・・つておい！！

危ない人には、ついていかないってお母さんに習わなかつたのかあ  
ああ？！！

そんな僕の問いを知るはずもなく彼女とチヤラ男は楽しそうに話  
している。

・・・なんかムカつく。

最終的には、一人で歩いてどこかへ行つてしまつた。

僕は、呆然と立ち尽くすしかなかつた。

## 彼女の『友だち』。

彼女はまた学校に来なかつた。

どこで何をしているのか。

わからない・・・。

周りのクラスメイトは、いつもと変わらない。

あいつって、もしかして友だちになかったのか？

クラスメイトとは、『友だち』ではなかつたのか？

あんなに楽しそうに見えたのに？

あんなに笑っていて皆に頼りにされていたのに？

あいつが、あんな性格だつて分かつた瞬間、怖がり恐れ避けるのかよ？！

沸々とわき上がる怒りという感情。

その感情は自分自身にも向けられていた。

言いたいことを、問いかけたいことを皆にぶっちゃけられない自分の事に腹が立つし情けない。

僕ってこんなに非力だったのか。

僕は机に突つ伏して歯ぎしりをした。

ああ！－むかつく！－

なんなんだよ・・・。

あいつは、チャラ男とどつかへ行つてしまふし・・・！

・・・っていうかあの二人はいつたいどこへいったんだ？！

もしかして、ホテ・・・いや、ない！これはないよ・・・な？

彼女が許すはずがない・・・。

でも・・・でも！－彼女が望んでそれをするとしたら・・・？

いや、それはないよな・・・。

じゃあ、一人で心中？！

二人とも人生に疲れてて『じゃあ、自殺しようか？』って流れになつたとしたら？！

いやいやいや・・・そんな『北海道に行こつか』みたいなノリはなによな！－

ない・・・よな？



## 安堵の息とこれから不安。

教室がざわめいている。

なぜなら、僕たちのクラスに転校生が来たからだ。

僕は、それより彼女の事を考えていたので、三月の今頃に転校生が来るなんて珍しいなくらいしか思つてなかつた。

でも転校生の顔を見たとたん、自分の目を疑つた。

だって、そのキャラ男はこの前の彼女と一緒にいたキャラ男だったのだから、

「北山雅<sup>きたやまや</sup>也<sup>じ</sup>！ よろしくうな」

雅といつキャラ男は、名前にふさわしくない程、キャラ男だった。

名は体を表すところけれどあれは嘘なのか？

まあ、そんな事はどうでもいいや

とにかく、心中はしてないみたいだし。

僕は、密かに安堵の息を漏らす。

「よろしくうな！ 和也！」

「うわあえああああああああ？！？」

僕はいきなり話しかけられて飛び上がった。

周りの視線が僕へと集まる。

あああ・・・もつ。

「どうかしましたか？西山くん」

田山先生が訝しげに僕を見る。

「い、いえ、なんでもありません。すみません」

「そうですか。では、授業を始めましょう」

先生は黒板に向き直り、また文字を書き始めた。

・・・ったく、キャラ男が隣の席だとは・・・。

早くクラス替えしねえかなあ。

## 新しい季節。

待ちに待つたクラス替え。

えっと・・・僕のクラスは・・・

・・・あつた。

3の3だ。

担任は、変わらず田山先生だ。

彼女は・・・

3の5。

はなれたのか。

嬉しいような哀しいような・・・。

まだ、彼女は学校に姿を見せない。

今日だつて。

また行つてみようか、あの豪邸に。

「だありん」

また翔子か。

わつ・・・。

翔子は相も変わらず後ろから抱きつぶ。

「和也、おはよーさん」

声をかけて来たのは、雅だつた。

この頃、雅といふ事が多い。

席が隣だつたのもあるし、ここつといたり面白い。

そして意外に話が合ひつかうだ。

チャラ男だけど。

でも、彼女の事は聞き出せずにはいる。

「はよー」

「きこてきこてーー。」

「なんだよ」

「あのねーわたしたち同じクラスなんだよー」

まじでか。

勘弁してくれ。

暴力地獄の次は抱きつき地獄かよ。

「もちろん、わいもな！」

「僕もや…」

きやがつた。

れつき、隊員といったはずだが。

いつも、ボウフヲみたいにわいて出やがつて・・・。

つていつかこいつも同じクラスかよ・・・。

先が思いやられるぜ・・・。

## 彼女のお父さん。

また、僕は彼女の家の前に立つてゐる。

やつぱり、いつ見てもすうい豪邸だ。

「どうしたね？」

後ろから、男の声がした。

また執事さんか？

振り向くと、立派なひげを生やした執事ではない人が立っていた。

周囲にはサングラスをかけた、ゴツいおじさんたちがいる。

僕は少しひるみながら尋ねた。

「えっと、美夏さんは……」

「美夏かね？」

呼び捨て？

もしかしてお父さんとか？！

「はい」

「美夏は……今ちよつといつては、いないんじや。すまないのう」

「いえ、あの・・・じゃ今ビリト?」

「私の伯父のうちだ。いつてみるかね?」

「え? 今・・・ですか?」

「いや、今じゃなくてもよいが・・・都合のつく時で」

彼女のお父さん(?)が名刺を僕に差し出す。

【 軽山田武郎 株式会社 軽山田 社長 ×××-×××  
-×××× 東京都 区××××-×××】

社長さん?!

つていうかやっぱお父さんなのか。

## 伯父さんの家。

僕は今、彼女のお父さんの伯父さんの家にいる。

ややこしいけど。

つていうかなんだ！これ。

もつと、豪華だと思っていた彼女のお父さんの伯父さんの家は、庶民の僕さえも見た事ないボロい家だった。

こんな」としたら、怒られるけど。

つていうか本当に東京なのか！？？？

なんと、伯父さん（＊「わざつたいのでもつ省略します」）の家は、木で囲まれていた。

簡単にこうと山だ。

「わざええ」

吐き戻す・・・。

そう、ここまで車で送つてもうたのは良いんだけど、山をのぼつたから

揺れが激しそぎて、酔つてしまつたのだ。

つて、説明してゐる場合「じゃない！」

「マジ、吐き気死の……。

僕は、右手で口を押さえて左手で（インター ホンがないので）扉っぽいものをノックした。

「はあい」

出て来たのは、なんと元氣そうな美夏だつた。

全然、しんどいわけじゃない。

「なにしてんだよ！」

「わっ！カズ……！」

彼女は、丸い皿を更に丸くして驚いた。

「わっ……じゃないー学校！」によつ……」

「やだ」

彼女が口を尖らす。

「クラスどうなつた」

「おま……じゃなくて美夏さんだけ違う組」

「えええ？ー尚更やだ。ひとつとか」

なんか前よりわがままになつた気がする・・・。

## 懲りない彼女。

「とつあえず、授業は受けりよ。受験生なんだよ?僕ら

「それは大丈夫。勉強してるから」

さ、さすが優等生!—!

「だから・・・ほつといでよ・・・」

だんだん小さくなつていく彼女の声。

「まだ引けずつてんの?あの」と・・・

あの」と・・・それは彼女の本性が皆にバレた事である。

「・・・じつでも良いじやん

口を尖らせる彼女。

「美夏ちやあん-」ールまだあ?」

家の中から聞こえる男性の声。

「はあい」

彼女の声が変わる。

出た、ブリッ!。

まだやつてんのかよ。

いい加減、本性バラしたらいいのに。

「あれ？ 美夏ちゃん、どちら様？・・・もしかして彼氏かしら？」

「いや、あの・・えっと・・・ちが・・・」

僕が彼女の顔色をうかがいながら答える。

「違いますよ！ ありえない。こんな奴」

## 彼女と僕。

「こんな奴う？！？！」

そりや彼女と僕は釣り合はないけど……いろんな意味で。

なんか傷つくなあ……。

「じゃあ……？」

「クラスメイトです」

「もう。お前前は？」

「西山和也です」

「和也くんね」

「ついつい笑う女人。

「和也くんも食べない？いま、毎日ご飯なの」

「え……でも、僕は……」

「若い子が遠慮しないの一ほら、あがつて

僕の手を引く女人。

強引だなあ、この女性……。

「どうも・・・」

部屋には、顔を赤くした伯父さんらしき人がいた。

つてことは、この女人は伯母さんかな？

「はい、伯父さん」

彼女が、皿ご飯が乗ったちゃぶ台にビール瓶を置く。

そして、コップにビールを注いだ。

「すまないねえ」

女人が、おひつに入った玄米を茶碗に盛りながら言った。

「いえ、そんな。ただ無料で居候させてもらってるんだからこれくらいしないと」

「助かるわ。和也くん、たべてね」

「はい」と僕の前に茶碗を置く伯母さん。

「はあ・・・」

## 彼女の問い。

今、僕は彼女と山の中を散策をしている。

薄桃色だっただろう桜の木は、すっかり変わって、あちいらにうらこ  
緑色の葉が顔を出していた。

「あんたさ・・・」

彼女が口を開く。

「んー・・・・?」

「翔子の事好き?」

「翔子? 嫌いじゃねえけど? おもしれえし」

「そつか・・・」

彼女が頭を伏せる。

「・・・・じやあ、わた・・・・」

「美夏ちやああんー!」

遠くから聞こえるおばさんの声が、彼女の声を遮った。

「晩ご飯手伝つてくれない?」

「はあい……」

彼女は、応えると僕に「『めん』といつて走って行ってしまった。  
あいつはいったいなにを言おうとしてたんだろう……？

つていうか何で翔子？

僕はぽつんと立っていた。

## 証明

結局、僕は何もできずに帰ることになった。

無念・・・。

どうせつたら学校に来てくれるのだろう？

どうせつたらいいんだ？僕は

どうせつたらいいんだ？僕は

何もできない・・・。

自分の無力を知った夜だった。

「どうしたらいこと思ひ？」

僕一人では、到底思いつかなかつたので翔子に問いかけてみた。

「ああ？」

「ああって・・・」

「まつといたらいいんじゃない？」

「まつとけねーよ、受験もあるのこ

「そんなにあこが好きなワケ?」

「す、好き?...」

思いがけない翔子の言葉に、感づ僕。

「いや、そんなに感情じゃなくって・・・。」

「そんな感情でしょ?明らかに」

「ビ、ビ!」

「ダーリン、あこつの」ひばつか心配してんだもん

翔子が、ふくらつと頬を膨らませる。

「そんなこと?」

・・・なによ。

「じゃあ、証明してよ」

「証明?」

翔子がにまあと笑う。

「つー

嫌な予感・・・。

「私と付き合つて？」

「あ、あつえねえつついのーーー！」

「じゃあ、ダーリンがアイツを好きな事、皆にバラしかねやねー。ねーい、みんなど・・・」

「あわわわー！ ちょっと

思わず翔子の口を塞ぐ。

つてが、これじゃ僕がアイツのこと好きみたいじやん。

「？いい、せじ、」

「わかつたよー！」

やや、自暴自棄になりながら承諾した僕だった

## わがまま姫。

あの日から、僕に不幸が次々と襲いかかった。

例えば、翔子が抱きついて来て失神しかけるし、皆には僕が彼女の事を好きだと誤解するし・・・。

やっぱ、つきあいつとか軽々しく言つんじゃなかつたな。

「ダーリンッ！」

来た・・・。

「やっぱ、わかれよ!」

「やーだ！私の初めての彼氏なんだからこんなに早く別れるなんて、ずええつたいやだ！！！」

どうにかしてくれ・・・。

このわがまま姫を。

「ダーリンは私の事好き？嫌い？」

「嫌いじゃないけどね・・・」

「じゃあ、いいよね？」

翔子がにこりと笑う。

しまった・・・。

丸め込まれてしまった・・・。

「ほら。次、移動教室でしょ、早く行こー！」

## 茜色の教室。

放課後、日が西に傾きかけた頃。

僕は、国語の文法ワークを教室に忘れたのでとりにきていた。

遠くから、吹奏楽部の練習と野球部の掛け声が聞こえる。

僕は何気なく教室の扉を開ける。

ーガララ

よかつた。

開いてたみたい。

日真、鍵を閉め忘れたのかな？

ま、いいや。

そんなこと。

僕が顔を上げる。

その向いには、茜色に染まった机といすに座っている

彼女がいた。

こんな所にいるはずが・・・。

僕は、じりじりと皿をこすった。

「美夏……？」

呟くような聲音だった。

そのせいか、彼女は気づいていない。

ただ、虚空を見つめていた。

,

## 事実

「美夏？」

今度は聞こえるようになり、やっと彼女は我にかえった様だ。

「カズ・・・？」

彼女は、僕を見てゆっくり首を傾げる。

「うん。ついでいうかこんな時間になんでいんの？」

「まあ・・・」

彼女は、言葉を濁した。

「それよつと、あれほんと？」

「あれつて？」

彼女は、まっすぐ前を見たまま言った。

「翔子とつまあつてる事」

「な、なんであ、それつーー！」

情報いくの、はやすぎだろつー。

「まあ・・・ね？」

今度は僕が言葉を濁した。

## 彼女の彼氏。

「やつぱ、翔子の事好きなんじやん・・・」

「や、でも・・・」

「私も彼氏作るしつーじゃあね、お幸せに！」

「へ・・・?」

彼女は、立ち上がりそそくあと教室に出た。

彼女に『彼氏』が出来たのは、その次の日だった。

「美夏ちゃん、来てるよ。めずらしいね

ふと耳に入ったクラスメイトの談話。

「やつぱ、アノ子彼氏で來たらしよ？」

えええ？！！

「よく、あんな子とつきあおつと思つたね、美夏ちゃんの彼氏。で、  
誰なの？」

僕は耳を澄まして次の言葉を待つた。

「慶太郎くんだったでや」

け、慶太郎？！？！

「あの、ファンクラブの子？」

「わいわいこよ」

「なるほどね、ゾッコンだったもんね」

## テスト。

ええ？！

つてか早過ぎね？

顔に冷水をぶっかけられたような気分だった。

「ダーリン！」

翔子が抱きついて來たが、僕はそれも氣づかず立ちつくしていた。

「ダーリン？」

「つ、ああー翔子？なに？」

「ダーリン、今朝からずっとぼーっとしてゐー。そんなにショックだつたわけ？」

「だ、だれがつ」

翔子も彼女と慶太郎がつきあつた事知つてゐるんだ。

「中間テスト」

「へ？テスト？」

「うん、英語のテストをつまき返されたでしょ」

「うあつ、そのことかっ！」

恥ずかしつ、彼女と慶太郎の話かと思った！

僕、意識しすぎだ……。

「そんなに悪かったわけ？」

「えつ…どうだっけ」

いつの間にか、机の中に入れてたテストを見てみると……

「げつ…! 24点?…!」

「うわ、ヤバくない？ 3年の成績は内申に入るんだよ？ 受験に響くよ、それ」

「ヤベ…・・・、ビーしょ。つていうか、翔子はどつだつたんだよ？」

「私？ 私はもちろん、36点…」

「うわ、頭悪いー」

「ダーリンは人の事言えないでしょー！」

「皆の衆…テストはどうだつたかな？」

南藤が入り込んで来た。

皆の衆つて二人しかいねえのに。

「僕、  
24点」

「私は36歳、南藤は？」

「僕は1点さーーー！」

「は？？」

そんなに威張つて言える点数かつ！！！

一體の衆、僕ちんを目指し頑張りたまえ！！！」

頑張れ二ひとハレハ風に?

二 ていうが、もしかして・・・

お前アスエで一翻レレ点數は何だと思ハ?」

そりやあ、  
1点に迷あつてし難や!!

セイリヤ・アーヴィング

「いい、何でも「1」がいいと思つてゐんだ。」

重症だな。

「ちなみに、成績もオール1だぞーーー！」

「あ、やー」

「南藤、高校時代のやつ。」

「100点数ながらでもこちるが……」

「今のがじゅ、エリもこけねえよー。」

## 一位の座。

「ダーリン、順位発表見に行こー！」

順位発表とは、今回のテストの結果を中3の全員中1～50番まで総合点で順位がつけられて

掲示板にそれを書いた紙を貼られることがある。

ちなみに、1年の時からそこに僕と翔子はランクインしたことがない。

いわすもがな、彼女は、毎回1位だ。

翔子と廊下を歩いていると、掲示板に数十名、人が集まっているのが見えた。

なぜかその集まりは、どよめいていて皆同様に、驚いていた。

かすかに、声が聞こえた。

「軽山田、一位じゃないのかよ?！」

えええ?!

心の中で、驚きの声をあげる。

ありえない、彼女が一位じゃないなんて。

「めつずりじーつーなんかあつたのかな??」

横からきこえる翔子ののんきな声。

で、誰が一位なんだろ??

僕の疑問はすぐに解けた。

「一位は、先間京華らしいぜ。」

# phantom of beauty ~美しき幻影~

マズマキョウカ?

聞き覚えの無い名前に首を捻る僕。

そんな子、いつたけな?

「『phantom of beauty』かよ! 転入したばっかなのにすげえな!」

ふあんとむ おぶ びゅーてい?

「なんじゅそりや?」

「美しい幻影・・・」

「つをひ」

後ろから、つぶやくような声が聞こえた。

それにびっくりする僕。

そこには、切れ長の目で黒い長髪。

賢明そうで整った顔立ちの女の子が立っていた。

「だ、だれっ?!」

「先間京華・・・

「君が?..」

「そう・・・」

先間はにこりともせずにこりなずいた。

## 昼飯。

—キーンゴーンカーンゴーン

予鈴がなつた。

「あ、もうすぐ昼休み終わりだ」

「え。まじでか」

昼飯食つてねえよー

ちなみに、この中学の昼飯は給食ではなく各自が持つてくる弁当だ。

僕らちはお母さんもお父さんも料理が作れないため、

いつも、自分が登校途中にコンビニに寄つてパンを買う。

最初は面倒くさかったが、この頃は日課のよつになつている。

僕は、いそいで教室までいって、バッグを探つた。

だが、みつからない。

「あれ、なんでだ・・・?」

僕は苛立ちながらバッグを探る。

「ないー!」

「ダーリン、どうしたの？」

「パンがねえ！」

—キーンゴーンカーンゴーン

「・・・」

おなかすいた・・・。

幻。

日が傾きかけた頃、僕は家路についていた。

さつきから、ひっきりなしにおなかが鳴る。

ん？

わつきむじうに彼女が見えたような・・・。

まさかな・・・。

おなかが減りすぎて幻覚みたのだろう。

やっぱ昼飯無しはきついな。

僕は自分の頬を一、二回たたいてまた家路を急いだ。

・・・どこからか彼女の笑い声が聞こえる。

僕は、辺りを見回した。

あ、あれか？！

彼女らしき髪の長い女の子を見つけた。

後ろを向いていて顔は分かんないけど。

「美夏っ！」

彼女らしき女の子の肩に手を置く。

振り返ると・・・

彼女じゃなかつた。

「なに?」

「いや、人ちがいです。すみません・・・」

「もう少しだけ

そういうと、彼女じゃない女の子はワンピースの裾をひるがえして歩き始めた。

「すみません・・・」

僕はもう一度女の子の背中に謝つて

肩を落として家に帰つた。

## もうすぐ修学旅行。

あああああ、先生の顔が、あの「トレーディ」の顔と一緒に見える……。

「あのお、先生

それなら、家で寝てたい……。

正直、修学旅行なんてどうでもいいんだけど……。

僕は翔子に背中を押されながら、訊きに行つた。

「先生に訊きに行つたほうがいいよ。あ、ほり田山先生来たよ

「おぼえてねえ、全く

「何班とかおぼえてる? 確かダーリンは私の班じゃなかつたけど

「うん

「え、知らなかつたの~?~?~

「マジで?~!~

「『』って明田だよ?

「え? あ、そうなんだ。いつだっけ

「ねえ、ダーリン。もうすぐ修学旅行だね。楽しみっ

「富部先生とは上手くいってますか？」

僕がそう言つとポーカーフェイスだった先生の顔が一瞬崩れた。

ちよつと、おもしれえな・・・。

「ん、まあな・・・。来月には結婚しようと思つていいん・・・」

少し照れ氣味に先生が言った。

その表情で幸せが垣間見えた。

「おめでとうございます」

「訊きにきたのはそれだけか？」

「いえ、あの。僕つて修学旅行の班、何班でしたっけね？」

「確か、西山は行動班は三班、就寝班は一班だ。行動班は千田、中山、里田と同じで、就寝班は高田、葉山、葛城とおなじだな」

## 大魔王参上！

「三班だつたら我輩と同じだな！」

また、ややこしそうな新キャラが出てきたよ・・・。

「おお、千田」

千田明・・・超がつくほどの問題児である。

黙つてりや、ちよつとかわいい女の子なのになあ・・・（泣）

「よのしへ頼むぞー我輩の足を引きあひぬよつになーー！」

「はあ・・・」

僕はそつ言つしかなかつた。

「おひ、もひ席もじれ」

僕は席に戻つて、ひそかにため息を付いた。

あんなヤツが同じ班だなんて・・・。

なんてツイでない・・・。

## トラブル発生！

「よしよ、修学旅行當日である・・・。

僕は、けたたましくなる目覚まし時計を叩く様にしてとめて、むくつと起き上がった。

眠い・・・。

「なんで朝の六時に集合なんだよ・・・」

文句を言いつつ、クローゼットを開ける僕。

ハンガーにかけてあるのは、学生服と私服だけだった。

いつもならび、体操服もかかっているのに。

「あれ？ 体操服は？！」

僕は、クローゼット中をさがした。

やべえ！――もう集合時間だ！

「和也ー？ どうしたの？」

「体操服がないんだ！」

「体操服なら母さんが洗つといったよ？」

「え？！乾いてる、それ？…。」

「ハハ。今洗つたばつかだから

「はあああああ？…。ちゅ、それで修学旅行に行かなきゃなん  
ねえんだよー。」

「嘘つ、今から取り出しちゃアイロンかけるから。和也はパンでも  
食べててつー。」

普段は洗濯とかしないで、なにでこんな時につー。

僕がダイニングでパンを食べていると、父さんが新聞・・・ではなく娘の子のフィギュアを片手に話しかけてきた。

「和也よー。」

「ん？」

「これをもつて行くのだ」

渡したのは持っていたフィギュアだった。

「ハハねえよ

「こや、こむ。おもりだ。真凜ひやんを父さんと思えー。」

まりん

「思えるかーー！」

「とつあえず、持つていくんだー！」

「ええ～・・・」

「いこな？」

「わい・・・分かったよ・・・」

「できたわよー！」

母親が差し出したのは、半分湿っている状態の体操服だった、

「濡れてんじやん」

「文句言わないのーーそれより、はやくしなことーー！」

「あ、うん」

僕は、湿ったままの体操服を着て家を出た。

ツイてない日。

「遅いぞー！西山」

先生に軽く説教されて、僕たちはバスに乗った。

あれ？だれだつけ、席が隣の奴。

「やあー！」

うわっ、朝っぱらからめんどくせえな・・・。

話しかけてきたのは、南藤好男だつた。

「西山君、ようじへんなー。」

ようじへ？

「はあ？」

「バスの席、隣だろ？？」

マジかよつ。

一時間ここつの隣にいるなんて・・・

「・・・今日はツイてない

「何か言つたか？」

「いや

席に座り一、三分経つたころ、南藤がつづむて呟いた。

「吐きたい・・・

「えええ? ! !

## 最悪。

「僕たん・・・乗り物しやすいんだ・・・纖細な神経の持ち主だからね・・・」

最後の一言要らなくね?

つていうか、ビニが?

心中で、毒づきながら好男にビニール袋を渡して、先生を呼ぼうとしたとき・・・

「おつかええええええ」

「つぎやあああああああああ」

なんと好男は、ビニール袋に吐かず、上を向いて吐いたのだ。

吐瀉物が噴水に様にわき上がる。

「なにやつてんの? おおおおお?...」

みんなもびっくり仰天して南藤を見る、そのあと顔をしかめた。

そして、先生が南藤にタオルを渡して床を拭き始めた。

僕は幸いながら席を立っていたため、何とか逃れたけど・・・

席が前後だった人には少しかかったそうだ・・・。

そのあと、南藤はバスから降りしてもう一つ服を着替え、へ「みんな  
がらバスに乗った。

## 最悪。（後書き）

。 . . はい、とこ'うじで今回汚い話になつてしましました。 . 。 。

スミマセン。

つていうか実はこれ実話です。

・ . . いや、私が吐いたんじゃないですよ？

母が小学校の教師で、よく小一とかもつので

生徒（児童？）が吐いたりするのは日常茶飯事だそうです。

この話では、修学旅行中ですが、実話では教室の中

噴水の様に吐いたらしくです。母の話では。

笑い話かどうかはよくわからないですが、

びつせ吐くなら変わった吐き方してほしいなど

思つて、書きました。

## メンソーレ 沖縄

あれから、いろいろあり、バスを降りて成田空港から那覇空港についた。

あ、言つておくの忘れたっけ？

一応言つておくが修学旅行の行き先は沖縄である。

『メンソーレ 沖縄』

といづ文字が僕らを迎えてくれた。

空港を出ると、むうんとした空気がまとわりつく。

沖縄だ。

沖縄に来た・・・。

「一旦、旅館に行って、荷物をおいてそれから行動班別にそれぞれ行動してください。まずは旅館行きますよ～」

といづ先生の声。

このじるの僕は中3の修学旅行が僕の人生を大きく変えることになるとは、知る由もなかつた。

本当に好きな人。

「西山つむぎ、翔子ちゃんとつきあつてんだろ?！」

葉山が身を乗り出して聞いて来た。

今は、午後十時。

先生に見つからないように恋バナ中。

え？ 男子なのに恋バナするのかって？

そりゃあするや。

枕投げとおなじくらい、もり上がるんだ

「まあ・・・な」

「いいよなあ・・・。俺、翔子ちゃん好みなんだ」

意気揚々と話す葉山。

「俺は、軽山田さんだなあ。あの笑顔が・・・！」

一人、妄想にふける葛城。

「僕は断然、先間さんだな。あのクールなところがたまらん――先間さんなら虐められてもいい！」

頬を染めて語る高田元

「あはは、つかよー」と葉山がツツコんだ。

「翔子ちゃんどこまで行ったの?」

「え? どうせ

「まじで? つきあつて結構あるだろ? キスくらこしちゃ

「ええ? うん? うん?

「もしかして手もつないでねえの?」

「うそ

「好きならそれくらいこするだろ?」

つまらなさそうに薦城が枕の上で頬杖をした。

「好き?」

僕が聞き返す。

「うそ

好き・・・。

僕は翔子の事を好きなのだろうか?

友だちとして好きだが恋人として・・・。

僕が好きなのは・・・

「ちょっと、ごめん！！」

「え？！？おいつ」

僕は三人の声も聞こえずに部屋を飛び出した。

## 言い訳。

部屋をでたのはいいものの、僕は彼女の部屋番号を知らなかつた。

なんて、カッコ悪い・・・。

そのせいで、勢いがしゅるしゅるとじょんでいくのがわかつた。

はあ・・・。

僕はいつもこうなんだ。

肝心なところがダメっていうか・・・。

部屋番号を知らなかつたら意味ないよね・・・と心のなかで呟いた。

僕は心のどこかでほつとしていた。

そんな僕にもつと嫌気がさした。

部屋番号がわからないなら、戻つてしまおりを確かめたり、なんなりできるはずだ。

怖いんだ。

今更、なんのよつて。

あんたなんか嫌いって拒否されるのが。

だから言い訳をして自分から殻からに閉じこもる。

傷つけられるのが怖くて・・・。

何で僕はこんなにへタレなんだろ？？

彼女みかのことは好きだ。

抱きしめたい。

抱きしめたいのに・・・

僕の女だつて

指さえ触れさせねえって。

他の男に彼女を取られたくない。

僕は、生まれて初めて自分が独占欲が強いことを知った。

生まれて初めて、彼女に対する恋心に素直になつた。

虎穴に入らずんば虎子を得ず。

「西山君……」

頭を抱えていると、気配もないのに後ろから声が聞こえた。

振り返ると、Tシャツ姿の先間京華まささまきよかがいた。

制服と雰囲気が違うが、やっぱり美人は何を着ても似合っていた。

「なんだ、先間か。どうしたんだよ」

「お風呂あがり……」

「何でこんな時間に……？」

「皆と入るのが嫌だから……」

「…………」

長い沈黙が流れた。

「葛藤……」

いきなり、先間が口を開いた。

「え？」

「葛藤してる……」

「先間が？」

「西山君が……」

な、なんでわかるんだっ！

そんなに僕、分かりやすいか？！

「虎穴(こけつ)に入らずんば虎子(こじ)を得ず……」

「けつ？」

「」とわざ・・・虎の住む穴（虎穴）に入るような危険を冒さなければ、虎の子（虎子）のような貴重なものを得ることはできない、ということ……

はうつ！

なんて適切なアドバイス！

「何で僕の悩みがつ？！」

「なんとなく……」

僕の問いに先間のそつけない返事。

なんとなくかよつ……！

とにかく、ゆっくりだけど勇気が湧いてきた・・・。

言いたい事。

「ねえ、先間さん。彼女の部屋番号じらない？！」

「502・・・」

「ありがとっ」

僕はそういうて、別棟にむかつた。

勢いよく、扉を開けたのはよかつたが・・・

なんともぬけのから。

メンバー一人としていないのだ。

「あれえ・・・」

「カズ・・・？」

背後から、声が聞こえた。

聞き覚えのある声。

胸が苦しくなる程・・・聞きたかった声――。

「美夏・・・？」

振り向くと、丸い目をよつ丸くした美夏がいた。

「『J』に行つてたんだよ・・・？」

ちがう、言いたいのはこんなのではない。

「男子の部屋。つまんないからかえつて来た」

本当に言いたいのは・・・

「僕、美夏の事好きなんだ・・・ずっと好きだった・・・」

「カズ・・・？」

「本当は自分でも分かってたけど、氣のせいにしてた……好きなこと」

僕は、息を吸つて言つた。

「付き合つて」

「私、もう付き合つてるから……」

「知ってる。けど、絶対そいつより僕の方が美夏の事……好きだ！」

「カズ……私……」

美夏が何か言おうとしたとき、足音が聞こえた。

先生だつ！

「うわー！」

美夏が僕の手を引っ張つた。

その手は少し汗ばんで熱かった。

僕は布団に潜り込んで、美夏は寝た振りをした。

一応言つとくけど同じ布団で。



## 返事は明日。

確認をして来た先生は宮部先生だつた。

「あらあ、軽山田さんだけ・・・？全員トイレかしらあ」

なんという天然・・・。

まあ助かつた。

先生が扉を閉めた時、僕らはふうっと息をついた。

宮部先生で助かつた・・・。

もし、田山先生なら即刻バレていた所だらう。

「自分の部屋に帰つて」

と冷たいお言葉。

「あのあ、返事は？」

「明日するから。この私が修学旅行で男子と布団に、はいったなんてバレたら、私の株大暴落よ」

お前が入れたんだろうがーとこう言葉はあえて口にしなかった。



## 屋外での説明。

「これは、～年の～によつて建てられ……」

一時間、この説明が続いている。

しかも、おくがい屋外で。

それに太陽がまるで、僕たちの頭を、焦がそうとしているかの様に、じりじり照りつけている。

日射病になりそうだ……。

暑い……。

すうつと汗が額を流れる。

それを手で拭う。

そんなことを、何回……いや、何十回も繰り返している。

まるで砂漠にいるかのような暑さだ。

あ、隣の隣の人気が倒れた。

周りが風に吹かれた木々の様にざわめく。

ん?

なんか見たことあるような・・・。

田をひらじてみると・・・

あれ、彼女みかじゃね？

近くにいた富部先生と田山先生が急いで彼女の肩を抱いて、どこかへ連れて行つた。

## 翔子の正体。

あれから、一日経つても美夏は戻つて来なかつた。

そして、話せないまま一ヶ月・・・。

中学校最後の夏休みが終わろうとしていたとき・・・。

（　）

僕の携帯の着メロが鳴つた。

電話だ。

・・・もしかして美夏？

僕の心臓は早鐘の様になつたが、翔子からだつた。

はあ・・・と心の中でため息をつく。

でると、嬉しそうな翔子の声が聞こえた。

「カズ！」

「なんだよ・・・？」

「別荘行こ、別荘！－」

「ベッソー？」

・・・ベッソ・・・別荘? ! ! !

「別荘つて! お前持つてたの? !

「持つてるよ~、親のだけど。軽井沢と北海道と京都とハワイとフ  
ランスに」

「お前んち、金持ち?」

「もつあらと! 山ノ内」つて知らない?」

「あの山ノ内弁護士? 行列のできる 相談所の! !

「そう。それがパパ」

「ええええ? ! ! !

てつきり、翔子は普通の家庭の子だつて思つてた・・・!

## 旅行

「……って、いうかで、何人で行くの？」

「んーとねえ……。雅でしょ、南藤でしょ……」

「マジかよ……あれとこつしょこつたら、倒産くさそう……。

「せんべ、京華ちゃんにい、美夏ちゃんも誘おうかな

「え、ええ?...」

「どうしたの?」

「……こや、なんでもねえ」

あんな事言つたあとで、恥ずかしかったの。

「ね?こいつよ

「でもなあ……」

「お願いつ

「……」

「ね?別荘の中は涼しいし、料理もおいしいよ?」

「なあ、自分が受験生だって分かつてる……?」

「大丈夫だつて 裏口入学すれば～」

「う、裏口入学かよ～」

「だつてさ、受験とか面倒くさくない？」

「でも将来困るや～？」

「なんとかなるつて。つつか、今が楽しければいいの。・・・ねえ、  
ダーリンはどこの中学校行くの？」

「まだ、きまつてねえな」

将来なりたいものとか、特にないし・・・特技とかもないしなあ・・・。  
。

「そりなんだ」

「うん」

「「「・・・・・・・・」」

長い沈黙が続く。

「とこかく、行こうよ」

「・・・・うそ」



そんなことないで決まった旅行、

行き先は小学校の修学旅行で行ったことがあるから、僕はあんまり乗り気ではなかつたが、

多数決で京都に決まった。

あのメンバーで行く先、ハプニングがないわけもなく・・・

「うわ、雨だあ・・・」

みんなが集まつて、さあレッシングーとこいつを、じとじと雨が。

「サイアクー」

翔子が、口を尖らす。

「ま、車乗つて」

乗つた車は、リムジン。

めつけや長い。

車内を見回して思ったこと、それは・・・

格差社会だ。

つてかわいがめる。

なんじやこれ。

なんで僕の周りにはいつ・・・金持ちが多いのだらう?

## 美夏の様子。

車の中では、とにかくうるさかった。

南藤は自分の〇点テストコレクションがどれだけあるか話しているし、雅は大阪のたこ焼きがどれほど旨いかを熱く語っていた。

仕舞いには、南藤が車酔いしたらしく「頭痛が痛い」なんて馬鹿まるだしなことを言つていた。

頭痛が痛いって・・・。

美夏はiPadを眺め、翔子は楽しそうに僕に話しかけている。

僕は、翔子の話に時々相づちをうちながら、美夏の様子を盗み見た。

美夏はガムをかみながらiPad画面を見ていた。

なんかちょっと気まずい・・・。

持つて来たマンガを読むと、翔子はふつと頬を膨らませすねた振りをした。

到着！

「ついたよーー！」

すっかり寝ていた僕は、ハイテンションな翔子の声によつて起つた。  
窓越しから外を見ると、ロッジ的な木製の建物が見える。

あれが、翔子ん家の別荘だらうか。

周りは緑に覆われていて。

ずっと寝ていたのでわからないが、どこかの山の中だらうか？

外に出てみると、思わず深呼吸したくなるような爽やかな風が吹いている。

緑と緑の狭間からぞしむれびは、僕の心を浮き足させた。

あたりはノンノンノゼンノンノゼンの大合唱である。

だが、いつものよつひることは思わず、僕をよつわくわくさせた。

「つまつまー！」

先に別荘の中に入った雅が歓声を上げる。

雅に続いて僕が入る。

「すげえ！」

中を見て僕も思わず声を上げた。

たこ焼きづくり勝負、勃発！

中は外観より、綺麗で整頓されていた。

息を吸うと、木の匂いが鼻腔をくすぐった。

心地いい、そんな言葉が似合ひやうな空間だった。

初めてとは感させないむじで懐かしさを覚えた

一  
腹洞二  
たなあ

そんにれば、其の屋敷がどうなるか。

僕が周りを見渡しながら言った

星二館食記

辯子が提案した

儀のなかである疑問が浮かび上る。

「そういえばさ、弁当持つてきてったけ？」

— ● ● ● ● ● ●

全員の顔が蒼白になる。

いや、ちがう。

雅だけはふふんとなぜか、じや顔をしていた。

「 わーこうと思つたで！俺が食材持つてきただから

その皿葉に嘘、安堵の息を漏らした。

「 たー」やきの食材をなー今からたこ焼き作り勝負やあああああー！」

はあ？？？！

たこ焼き。

「どんなたこ焼きを作つても自由やー。俺のたこ焼き魂が震えるくら  
いのモンをつくりてくれー！」

たこ焼きなんて作ったことねえよ。

つづーか、料理とかしたことねえよー。

「ダーリンはどんなたこ焼き作る？」

「ス、スタンダードで」

「つまんなくない？それ」

「やつは翔子は、どんなの作るんだよ？」

「私？私はね、闇鍋みたいにいろんなものいれてみようかな

「先間は？」

「適当」

「適当つて・・・。

「僕ちんはね」

割り込んできたのは南藤である。



スイーツっぽいた」やや。

ムキヤー、ウキヤーと自分の扱いに反論する。

だが、ボギヤブライターが少ないため、なんども同じ言葉を繰り返す。

そんな南藤をほりつておいて・・・

「軽山田さんはどんなのつくんの~?」

翔子が聞いた。

「私はスイーツっぽくしようかなって・・・

彼女が控えめに微笑む。

「スイーツ?たこ焼きで?さすが、調理部の部長やなー。」

「いえ、そんな・・・」

たこ焼きでスイーツ。

あまり想像はできないが・・・。

たこ焼きにチョコが入つてたりするのだろうか。

それより、翔子の闇鍋みたいなたこ焼きと、先間の「適当に・・・」  
発言が今は一番怖い・・・。



救世主はバカだった。

「でも、その材料とかは具とかはようこしてあんの?」

疑問に思つて雅に訊く。

小麦粉とか玉子とかは持つているのを見たけど・・・。

「わ、忘れとつた!」

ええええ? ! !

またもやハプニング・・・。

「大丈夫さ!」

そういったのは南藤だった。

「僕ちんがじいやに頼んでおいてあげたぞー・タ食もおやつもねー!」

おお、意外なところに救世主メシアがいた!

(つていうかじいやつて南藤の世話役か?)

少し南藤を見直し・・・

「まあ届くのは夕方だけどねー!」

「はあああああ? ! ! ! !

その後、南藤に非難の嵐だつた。

じこや、サボる。

「お、おなかすいた~」

夕方の五時頃、僕らはテレビでやっているグルメ番組を見ながらもうつぶやいた。

「南藤、まだなの? 食料は」

翔子がハリのない声で聞いた。

「わ~ん~はずだけど・・・」

と南藤も珍しく自信なさ『』で。

「はあ~~~」

みんなが一斉に力のない溜息をついた時だった。

「お待たせしました」

と背後から声がきこえた。

「やつとやれたー」

やつとやつて振つ返ると・・・

「ええ?..」

美夏が素つ頓狂な声を上げる。

それもそのはず。

そこには、慶太郎がたっていたのだ。

両手にはパンパンに膨らんだ袋が握られている。

慶太郎がじいや？

南藤を横目で見ると驚いていた。

じゃあ、慶太郎はなんのために？

もしかして、美夏をおいかけて・・・？。

「どうしたの？！なんでこんなところに？！」

そう言って美夏が慶太郎に駆け寄る。

むうとする僕。

美夏と僕以外のみんなはあっけに取られていた。

「な、なぜだ、じいやは？」

「じいや？ああ、あの人気がじいやなのか・・・？  
ま、いいや。とにかくさ、美夏ん家行こうと思つてインターホン  
押そしたら漫画みたいな白くて長い老人に話しかけられてさ。  
これ届けてくれって」

美夏・・・ふうん。呼び捨てしてるんだ・・・。

嫉妬に狂う僕をよそに南藤は慶太郎に詰め寄った。

「ジニヤ、どつか懶子懶子のか?」

「いや、ゴルフでいけないからって。ギャラあげるからっていわれてさ。そんでもなつがい車のせられて行き先もわからないまま、ここに来たわけ。つーことは臨時じいや？」

## たこ焼きのハウ・トウ。

「まあ、つべりうめ

僕のその言葉でたこ焼き勝負の火蓋は切って落とされたのだった。

つていうか、たこ焼きの作り方分かんねえ・・・。

小麦粉とか入れればいいのか・・・？

そうだ、雅に訊いてみよう。

「雅、たこ焼きつじどう作るの？」

「勘や！」

「勘かよつ！」

お前、行きの車でたこ焼きにひいて熱く語つてたんじゃないのかよ  
つ！！

もう、いいや。

適当にやつたら、作れるだろ・・・。

なんやかんやで作つていつたが、ほんとにこれでいいのか？

出来上がったのは、真つ黒のたこ焼き。

焼き過ぎたかな。

味見してみると・・・

「お～えつ。なんじやこじやあつ」

中が全然焼けてねえ。

サイアクの状態。

「お、できあがつたんか」

雅が僕の肩越しに真つ黒のたこ焼きを見た。

「つてなんやこれ。ほんまにたこ焼きか？？」

雅の大きな声で皆がわらわら集まる。

「わ～ヒドくない、これ？」

「味見してみ、南藤」

なぜか審査員の雅が南藤に真つ黒のたこ焼きを渡す。

持ち方つ！

汚い雑巾を持つときのよつな・・・。

つーか南藤、毒見役かよ。

氣の毒に・・・。

「へ? なにこれ」

と、南藤が真っ黒のたこ焼きを口に入れた瞬間。

ボフン

と爆発音が聞こえ、南藤が顔を真っ赤にして倒れた。

「な、なにいれたんや。カズ」

やつぱりアレはまづかつたか・・・。

辛味がある方がいいと思つたんだけど。

「タ、タバスコを少々・・・」

「タバスコあおおお?...!」

「南藤死んだな」

## 黄泉帰つた南藤

「 わあ、バカ 南藤はほつとこへー 」

いや、あれほつとこへいのか？

皿田剥ごてぬナジ。

「 次、翔子ちゃんこいりハヤ 」

「 ハコなんだけぞー 」

翔子が持つて来た皿の「ハネ」には・・・

なんじやあれ？！丸くないけど。

翔子が作つたたこやせ、たこやせではなかつた。

えつと、わうだな。

びからひかとこいとお好み焼きとかわいこいカンジ。

「 たこやせつとよくわかんなくてー、食べたことないこしひれあ 」

「 なんやで？！ほんまかーもつたいないなー 」

「 おいしこのー 」

「 あたりまえやんかーあの美味しさは神やでー 」

暇で爪をこじつていると、だれかが足をつかんできた。

足元に眼をやると

「み、水をくれえ・・・」

げつそりと瘦せた南藤が僕を見上げていた。

その姿はまるで、通りすがりの人食べ物を乞う老人のようだ。

コップに水をくんで渡してやると、南藤はあつとこう間に飲み干した。

「・・・僕ちんさ、死んだばあちゃんに会つてきた

・・・。

「そんじ、ばあちゃんにおまえはまだぐるなつて追い払われた・・・

」

・・・それ、やばくね?

## 先聞のたこやきせ。

「——で、次は先聞か」

「どんなたこやきが出てくるのか恐れおののいた僕だが先聞のたこやきは普通だつた。

・・・見た目だけは。

おなかがすいた僕が安心してそのたこやきをつまむと

「つまいじやん」

中に入つてゐるのはタコじやなかつたけどおいしかつた。

食べたことないけれど、なんか絶妙な味がした。

「ほんまや、うまいやん。何入れたん?」

「西山が食べたのはカナヘビの尻尾、北山が食べたのは女王アリ」

「うげええええ」

カナヘビの尻尾つて・・・。

どこのから拾つてきたんだ、そんなもん。



たゞやも勝負のオワツ。

「美夏ちゃんのたゞやもアラジおこしーよ。」

僕が水を飲み干してると、遠くから翔子の弾んだ声がした。

その言葉にみんながあつまる。

僕も、袖で口をぬぐつてみんなのもとにいった。

「おこしー。」

「うぬべ」

歓喜の声があがる。

そんな元気いのかと僕がたこ焼きをひとつつまむ。

そのたゞやは、見た田は焼き田は付いていないくて、コロ生焼きつて並つオチじやね？

とおもつたが口にこられるとい、ほんわり甘かった。

一言でこりと美味しい。

中にはタコの代わりにトマト<sup>トマト</sup>や、胡桃やらが入つてこる。

『『さん』ではなく完璧に『スイーツ』だった。

対決の結果は文句なしに美夏である。

それでやっとたこ焼き勝負の幕<sup>まく</sup>がおりた。

## たゞややも勝負の大作。(後書き)

やつとたゞややも勝負書を終わつました。・・・・・、A)・・・・

最初は書く予定はなかつたのですが・・・思つつきで。

読者の皆様はたゞややも勝負の背景が浮かんでこないかもしませんが、正直私も浮かばないです……

スマスマセンシ — (、。ー、。バ)。。。\*。

あと、言つておきたいことがあります。

たゞややも自身のことですが、カナヘビの尻尾と女王アコのことな保証しません。

とこつかおいしくなことをもいます。

もちろんタバスコも。

悪しからず。

でも、たぶんスイーツたゞややは美味しいこと思いますよ。

たゞ焼き粉とかじやなくて、ホットケーキミックスでつくると美味しいんじゃないでしょうか。

## 不審者侵入？！

それから、満足したぼくらは、臨時じいーー慶太郎がもつてきてくれた袋の中に入っていた柿ピーをつまみながらTVをみた。

もちろんビールは『「ジビモビール』である。

ガララと玄関の方から戸を開ける音がした。

みんなが好奇心と恐怖の混じった目を音の聞こえた方に向ける。

「ダーリン、ちょっとみてきてよ」

「僕かよ」

しうがねえな、と重い腰をあげて玄関の方に向かつ。

リビングと玄関をつなぐ廊下は扉で遮られているだけだ。

皆の視線を背中に感じながらこぞとこう時のために、『ジビモビール』のビンを右手に持ち、左手でドアノブに手をかけた。

## 突然の訪問者。

「慶太郎？」

玄関にいたのは、慶太郎・・・とあと一人がいた。

うつむいていて顔が見えない上に男でも女でもしているようなショートカットだから、性別がどちらか判断できない。

「ど、誰？」

慶太郎は汗をぬぐって、答えた。

「大魔王」

「は？！」

大魔王と慶太郎に紹介された僕と同じ年くらいの少女が顔を上げた。

先間とかと同じような系統というか、どこか神秘的な雰囲気を醸し出している。

だが、そう思ったのはソイツが喋る前までだった。

「わっはっははは、我輩が大魔王である！」

いや、それ慶太郎から聞いた——じゃなくてつ！

何この、誰かさんと同じノリ。

つていうか同じクラスの千田明じやん！

「何でこんななつれてきたの」

ため息混じりに聞くと、慶太郎は苦笑いして答えた。

「いやー、俺がさ、帰ろうとしたらいちまで送つてくれた車がどつかいつてさ、  
しうがない。自分で帰るかつて歩いていたら、遭難しちゃってー。  
で、大魔王もさ、同じみたいだから。つれてきた」

つたく、何で僕の周囲には面倒くさい奴が集まるんだ。

「ひそしぶりだなー我輩の夢は世界征服であるー。」

聞いてねえよ。ってか、世界征服つて・・・。

世界征服。

「まあ、そんなこんなでよろしく」

「お名前は・・・」

美夏が訊く。

「千田明さ・・・」

「大魔王だ！」

「大魔王？！面白い名前！よろしく～」

そう言つたのは翔子だった。

翔子らしいな・・・。

「ああ、一緒に世界征服を目指そ〜！」

「おう」

「それなら僕ちんも加わるぜ！金曜日を休みにするー。」

「あ・・・バカが三人・・・」

「じゃあ、俺も！秋休みを作るー。」

なんて雅も加わり、

「俺も！」

お前もか！慶太郎。

で、残りは美夏と先間と僕。

「私も・・・」

先間まで誘うなんて・・・すげえ！大魔王パワー！

「じゃあ、私も」

美夏まで・・・。

「おやー！西山くん。世界征服に加わらないのかね？」

告白？

結局、入ってしまった・・・。

あれから、TVを見ながら、こどもビールで大宴会であるこどもビールなのに なんでみんな酔つてんだよ！――

翔子は、TVに話しかけてるし。

南藤と慶太郎の会話は噛み合っていないし。

大魔王と雅はいつもどおりだし。

先間は、大笑いしてるし。

美夏にいたっては・・・いつもの翔子みたいなのだ！

コレが一番ありえねえ！

心臓が口から出そうである。

翔子にされても何も感じねえのに。

やっぱ僕、美夏の事好きなのかな・・・？

「ちょっと、美夏！いい加減はなれりつ――」

「ええ～、もうちょっとだけ」

やつらひいて、僕の腕を話さない美夏。

・・・今ならい告げる氣がする・・・。

酔つてゐるし、それに酔いがさめても覚えてないよね・・・。

つぱをのみこみ、手をぎゅっと握りしめた。

「・・・美夏」

「なあ」「?」

「・・・さだ」

「え?」

「好きだ」

じいやの失敗。

「 つて、寝てるしつー。」

美夏は僕にもたれて寝息を立てていた。

即寝かよ。

ありがちなオチ・・・。

まあ、いいや。

ピロンピロン

着信音がなった。

僕のケータイか。

美夏を寝かせて、机の上においてあつた携帯電話を取つた。

受信ボックスには見たことのないメールアドレス。

メールをひらくと、すぐに送信者がわかつた。

\* \* \* \* \*

西山和也様へ

私は大変な失敗を犯しました。

あのこじもビール、本物のビールでした。

スミマセン (\*、 \* )えへ

\* \* \* \* \*

じいやああああ！――！

「(\*、 \* )えへ」じゃねえよ！

つていうかなんでじいやが僕のメルアド知ってんの？！

## 窓から見えた美夏。

そんなこんなで無事に（？）夏休みが終つた。

8月より少しましになつた陽光が窓から差し込んでいた四時間目  
社会（歴史）の授業。

社会の先生が黒板を埋め尽くすほど書いているのに関わらず、僕の  
ノートは真っ白だった。

居眠りしているわけでも、ケータイを弄<sup>いじ</sup>っているわけでもない。

ずっと美夏を見ていた。

1年3・3の教室から運動場が見える。

どうやら3・5の女子は持久走をやつてこなした。

その中にもちろん美夏もいる。

彼女は顔を紅潮させて、後頭部でくくった長い髪を揺りしていた。

息遣いや熱がここまで伝わってきた。彼女は頑張っていて少し胸が詰まつた。

「 西山、きいとんのか、おい西山」

「あつーはー」

「きいとらんかつただる、立つとけ」

「はい・・・」

僕は席を立つた。

氣になつて少し、窓を見る。

美夏は走り終えたところだった。

クラスメートと笑顔を交わしている。

「西山ー。」

「はー」

「よそ見すんな、今度よそ見したら出で行つてもいいから」

「はい・・・」

「じゃあ、今の大坂城を建てたのは誰か答えてもらおうか・・・そ  
うだな。南藤」

たしか、豊臣秀吉・・・だよな。

安土城が織田信長で江戸城が徳川家康なはず。

「大工さん」

南藤は胸をはつて手を腰に当てて自信あり気に答えた。

確かにそうだけれども…

「不正解」

南藤がブーブー言っていたけど、先生は無視して次の人に当てるた。

「じゃあ、千田」

「我輩」

・・・論外だな。

「・・・じゃあ、西山、当たったら座つてもいいぞ」

「豊臣秀吉・・・？」

「不正解」

ええ？でも豊臣秀吉じゃ・・・。

「正解は、徳川家康だ。豊臣秀吉の建てたのは夏の陣で落城したんだ。覚えとけ」

この問題、美夏なら答えられたのかな。

結局、僕は美夏のことを考えていた。

## 僕の決心と翔子の涙。

四時間目終了のチャイムになると、教室にいた大勢の人が食堂へ向かうため出て行く。

「ダーリン」

翔子が僕の肩を叩く。

「どうしたの？ ぼーっとして、いつものことだけじゃあ

「ん？ いや・・・なんもない」

翔子が一人分のお弁当を置いて、前の席を僕の方に向けて座った。

昼休みはこうして一緒に翔子の作ってくれた弁当を食べるのが日課になっている。

翔子は何となく料理ができるさそうなイメージだが（僕だけか？）

コレが意外と美味い。

男の僕には物足りない気もするが、

タコさんワインナーとか前も言ったように両親が作れないの、嬉しい。

一応言つておこう。

両親が料理できなくて、僕も料理できないのに誰が料理つくるんだ？

つて思う人もいるかも知れないけど、つむじはちゃんと、料理上手なおばあちゃんがいる。

「ダーリン、玉子焼き食べてみてー。今日のは自信あるんだあ

「え・・・うん」

翔子がアスパラガスのベーコン巻きを、ほおばりながら言った。

僕は今日、翔子にあることを言おうと決めていた。

「あのや・・・・

「ん?」

「今日で一緒にお弁当食べるのやめよう・・・・・

「え・・・・・?それって・・・どういふ意味・・・・?

翔子の顔がひきつる。

「1)めん。別れよつ・・・・

カラソと翔子の箸<sup>はし</sup>が乾いた音を立てて床に落ちた。

慌てて拾つ翔子。

その瞳にはうつすら涙が浮かんでいた。

心が血を流しそうだ……。

・・・翔子の顔を見れない。

僕のことを好きでいてくれて、お弁当も作ってくれたけど……。

「でも、関係を断つとかじやなくて、友達に戻るつ……？」

翔子は涙も拭かずつむいて、肩を震わせている。

「いいよ」

「・・・え？」

「ダーリン、美夏ちゃん好きなんでしょう？」

顔を上げた、翔子が赤い目でニッとした笑う。

「なぜそれを？！」

「バレバレだつづーの！ 美夏ちゃん以外全員知ってるんじやない？ 美夏ちゃんも知ってるかも。ダーリン、分り易すぎだしつ！」

・・・恥ずかしすぎる。

「後悔しても知りないからね！」

「・・・うん」

「私、箸洗つてくれるねー。」

翔子はいつものように笑つて教室を出でいった。

その昼休み中に、翔子が戻つてくることはなかつた。

## 僕の決心と翔子の涙。（後書き）

「」の話（72話）の翔子の気持ちにぴったりの歌見つけましたw

奥華子さんの「あなたに好きと言われたい」

\*歌詞\*

追いかけて 追いかけても あなたの背中の端も見えない  
一つだけ願えるのなら あなたに好きと言われたい  
いつか笑つていっててくれたね あたしにはどんな事でも話せると  
それがどれだけ残酷かを あなたは知るはずもないでしょ  
う  
会えなくなるくらいなら 自分の心に嘘をつくの  
ずっと<sup>そば</sup>傍にいたい 恋人じゃなくても  
追いかけて 追いかけても あなたの背中の端も見えない  
一度だけ嘘でもいいから あなたに好きと言われたい  
もしもある子になれるなら やっぱりあたしはそれを選ぶでしょ  
う  
人は守りたいものだけに 本当の嘘をつけるのかな

夜中の電話 急にゴメンネと こつもの声であなたはさるこね

傍にいられないなら 優しくしないで

わづ一度と戻れないなら あなたを抱きしめられないなら

この声も この体もあの時 捨てれば良かつた。

会いたい ただそれだけであたしを動かしているんです

会えない ただそのことが すべての心をまどわしてゆくのでじゅう

追いかけて 追いかけても あなたの背中の端も見えない

わづ一度とあなたの声であたしを呼ばなくともいいから

一つだけ願えるのならあなたに好きと言われたい

## 早退と慶太郎。

「美・・・じやなくて軽山田さんいないすか?」

それから放課後に、僕は3・5の教室を覗いて、一番扉に近い奴に話しかけた。

「午後から熱で早退してたけど・・・」

「まじで?！」

またかよ、大丈夫か・・・?

「ありがとう!」

僕はそう言い残して、走つて学校を出た。

行く先は、勘の良い人じやなくてもわかるとおもう・・・たぶん。

美夏ん家だ。

息が切れ、足が鉛のように重くなつた頃、美夏の家の前についていた。

緊張と疲労で震える指でチャイムを押す。

三十秒くらこして、二十代後半の女人が出た。

多分お手伝いさんじゃないだろつか。

「じゅけら様でしょつか？」

「えつと、西山といこます。み、美夏さんのお見舞いに来たんです  
けど・・・」

「お嬢様なら、お友達と部屋におひれまわる」

友達 ?

誰だろ？

門を開けて、美夏の部屋まで來た。

そりこえは初めてか・・・。

あ～・・・ドキドキしてきた！

ドアから話し声が聞こえる。

「じゅけらだと、『姫』ではなく『姫』としか聞き取れない。

「お、おじやましまーす」

扉を開けると美夏と向かいあわせで座っていたのは

「慶太郎？！」

慶太郎がこっちを振り向いて、目を見開く。

そして顔が『驚き』から『怒り』に変わった。

「何、お前は人の彼女の見舞いに来てんだよっ！」

僕の胸ぐらを掴む慶太郎。

その手は怒りで、わなわな震えている。

美夏は冷えピタを貼つた額に汗を浮かせながら、心配そうに僕と慶太郎を交互に見る。

「別に見舞いくらい、いいだろつ！」

僕も負けじと言い返した。

「ふたりとも、もつやめて！」

美夏の鶴の一聲で僕の口は閉じられた。

「いい加減にして。人の部屋でわーわーわーわー、うるさいつたらありやしない！」

その美夏の言葉と鬼のような表情に口をあんぐり開ける慶太郎。

やつぱり、あいつ慶太郎の前でもふりつこしてんのか。

美夏の本来の姿を知らない慶太郎に、少し　いや、かなり優越感ゆうえつかんを持つてしまつ。

「出でいけよ」

慶太郎がボソッとつぶやくよつて囁く。

「やだよ。・・・お前がでけよ」

「なんでだよ」

美夏の目がキラリと光る。

「う・・・。

くそつ！」

僕は言おうとした言葉を飲み込んで、うつむいた。

「慶太郎、出てってくれる」

「え？」

彼女の予想外の言葉に田を見開く慶太郎。

まあみる。

そんなことを思つてしまつた。

どうかして、僕。

「話したいことがあるの。西山くんと」

西山くん・・・。

カズじやないんだ・・・。

一度田の畠へひめまれ。

慶太郎が出ていくと、美夏が口を開いた。

「あのやう・・・」

「ちょっと待って」

僕が美夏の言葉を遮る。

「・・・なによ」

「その前に言いたい」とがあるんだ

僕の決心が揺るがないうちに、伝えておきたい・・・。

「・・・」

「早く言つてよ」

いらだちを隠せない美夏。

「・・・。好や」

「はあ?」

僕の声は蚊のなく声のよひに小さかつた。

あの夜よつもつと緊張する。

・・・ハンパじゃねえ。

「なんて言つたの」

「・・・好きひて言つたんだよー」

美夏は皿を睨開いて「なにこいつんだ、こいつ」的な皿で僕を見る。

「意味分かんない」

「意味分かんないって・・・」

「要するになんなの」

え?

要するにひつて言つたことと言つたんだだけだ。

でも後ひとつ言つたことがあった。

「付喪神とか?」

「ひつ・・・」

図星。

「まあ・・・」

僕が煮え切らない返答をする。

「無理」

即答かいつ……！

へこむわ……。

つていうかなんか美夏イライラしてゐる……いつもより。

「私と慶太郎は付き合つてんの」

「知つてるけど……」

……でも、別れて僕と付きあおうとか思わないのか……。

美夏と家族以外で一番近いと思ってたのは僕のうぬぼれだったのか。

## ため息。

「・・・で、美夏の話ってなに?」

「 なんもない」

なんだそれ。

「美夏はどの高校受けんの」

「関係ないでしょ」

「そりゃそりゃだけじゃあ」

教えてくれてもいいじゃん。

「美夏は僕のことどうもつむつむつしてた?」

思わず出てきた言葉だった。

後から自分の言つた言葉に赤面する。

「・・・バカ」

「・・・」

それだけかよ。

「疲れた。出てつて」

せつこつ美夏の顔は少し青白い。

「あ、」めん。長居して

「はやく

いらだちを隠せない美夏の声が僕を急かす。

「じゃあ・・・」

扉を閉めた後、僕ははあとため息をはいた。

「遅いよ、バカ」

と美夏がため息を吐いているのも知らずに。

## 南藤の恋悪い。

「おーい、カズ！ 南藤、なんかおかしいねん！」

僕に教室に入った僕に、北山が汗を垂れ流して慌てた風に南藤を指さした。

「へ？ こつものじどうじやなー？」

「こつもよつ、やーー！」

確かに。

顔は紅潮し、いかにもほーっとしている。

僕は南藤に歩み寄って、声をかけた。

「おーい？ 大丈夫」

「どしたの？」

いつの間にか翔子が背後にいた。

いつものように抱きつかず、ただ僕の肩越しに南藤を見ているだけだが。

「なんか、南藤が変でさ」

「こつもじやない？」

「同じ事同じだつ！」

\* \* \* \* \*

「たしかにねえ」

翔子が、南藤の顔を覗き込んで、そのまま一いやけていく。いつも南藤にそんな事をしたなり、なんらかのリアクションをとるはずだ。

翔子が南藤の肩をゆらした。

「まつー！」

あ、気付いた。

「しょ、翔子様あああ？！」

驚きすゞぎだら。

南藤は目を見開いて、やしてばつのわぬむづしつつむこた。

子どもが親に嘘を付いたときのよつて。

「な、なに？」

「す、すみませんん！翔子様を一生愛すと誓つたのに・・・のこ、他の娘を想つているなんてええ！」

まさか南藤に限ってそれはないと思つが……

こ、恋<sup>わ</sup><sub>ラ</sub>患<sup>ハ</sup><sub>リ</sub>い？

## 南藤の恋。

その後、南藤は目から涙を流して謝っていた。

「他の娘？」

そんな南藤に少し引き気味の翔子が首を傾げる。

「ぐすつ。ほー」

鼻水をすすりながら、今日起きたことを涙声で話し始めた。

「それは、朝の電車の中だつたさ　。

僕たんがあの娘と出会つたのは、それはそれは、運命的な出会いだつたさ！

まあ、ぼくたんほどのイケメンアーノド優等生だから、モテるのもしかたないんだけど~

ウザつたい南藤の語りを省いて、簡単に言つと

今日の朝、南藤を好きという女の子に出会つたところ。

正直、その女の子を尊敬してしまつた僕だった。

「で、瓶山やれでどうなったんや?」

雅が口を挟んだ。

「いや、告白はされてないやー。」

「は?」

僕たちは呆然として南藤を見た。

「ただ、あまりにも僕の顔を見てだから、絶対に僕たちのこと好きやー。」

南藤のそのおめでたい脳に心底、呆れてしまった。

## ストーカー 南藤と大和撫子。

「で、どんな娘だったの？美人？」

翔子が好奇心を隠せずに身を乗り出す。

「よくぞ訊いてくれた！」

南藤がにやりと笑う。

「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花とはよく言ったもの

お前テスト1点なのに、よくそんな言葉知つてるなー。」

「彼女こそ、本当の大和撫子だろ！」やまとねでし

南藤が目をキラキラさせて語る。

なんか変な世界に入つてんぞ、南藤。

「そんなに綺麗やつたんか！」

「それはそれは。言葉では言い表せないくらいにさー。」

とかいつて、本当はそうじやないとかいふそんなんオチだろ。

作者の魂胆分かつてんだよ。じんたん

「気になつたので、あの娘とおんじ駅に降りてみたのセー・ウなみに僕が降りる駅は2つ前なんだけどねー！」

おい。

それ完璧ストーカーだろ。

翔子も雅も引いてるだろ？

それでも南藤には関係ないよ？ まだ熱く語りついでる。

「どうやら、ナデシコ女学院のようだ」

学校まで行つたんかい！

「記念に写真をとつてみたからみるかい？ 待ち受け画像にしてあるのセー！」

南藤がバッグから携帯をとつて、ディスプレイをみて、またもや、にやりと笑う。

やっぱこよ、この人。

変態になつつあるよ。

つてか変態だよ。

と心の中でつぶやきながら、ディスプレイを覗き込む僕。

翔子と雅も僕と同じようだ。

そこには、ナデシコ女学院の制服を着た美女がななめ横から映っていた。

絹のよつつな黒髪に、アーモンド型の澄んだ瞳。

そして、形のよいふくらした脣にチラリと見える首筋。

「美人〜！！」

翔子と雅が驚きの声を上げる。

それを聞いて南藤の口角が上がる。

「やつだらうやー。」

「名前知らへんのか？ また会えるつて限らへんや！」

「いいや。まためぐり会えるさー。僕とあの娘は運命の赤い糸でつながってるからね。あと、彼女の名前は知らない」

・・・・・。

「一言いい？」

たまらず僕が口を開いた。

「なんなのさ？」

「いっぺん、病院行け！頭の」

## レッシ パー カウ ア ピンヒーハンバスター!

眠れなー・・・。

真夜中の一時、受験勉強もきのここというで終わって、

寝みつと布団にぐり込んだものの

頭が冴えまくって眠るぢーじゃない。

やつこや、朝まで寝れる気がしねえ・・・。

そつだ。

パンペーパー行け。

コンビニのやナに明るこ螢光灯の光が、僕を迎えてくれる。店員さんの眠そうなやる氣のない声に軽くおじぎをして、

マンガが並んでるコーナーに歩み寄る。

ん?

あの長い髪は

「美夏？」

美夏の瞳が「こちら」に向く。

「・・・カズ」

やべえ。

なにを話したらいいのか分かんねえ。

「工口本見に来たわけ？」

「・・・へ？」

「変態つー！」

「ちよつ、ねがうつて！！」

弁解しても、美夏は汚いものをみるよつな目付きで見る。

それでもやっぱり美夏は美夏で可愛かった。

離れていく美夏。

「私、アメリカ行くの」

突然見夏の口から出た言葉に、僕は「へ？」としかいひことができなかつた。

「え？、ちよ。旅行、だよね？」

静かに首を振る美夏。

「むじうの学校に留学すんの」

「うわ・・・」

一瞬、目の前が真っ白になつた。

「こないだそれを言おうと思つたんだけど」

「・・・んで」

「え？」

「なんでそんなとこ行くんだよ」

美夏が離れていく。

手の届かないところ。

「・・・翻訳家になりたいのよ」

「外国に行かなくたって、勉強はできるだろ・・・?」

「怖くなつたの」

「え?」

「変わらない気がしたの、このままじや。悪い方へも良い方へにも」

## 南藤に春がきた。

「で、なんやねん」

僕と翔子と雅は、放課後に、南藤の家に集まっていた。

家というより、やかた館。

館といつよつ、豪邸やかただった。

美夏の時と同じくらいの。

びつじていつ僕の周囲にはお金持ちが多いかな。

類は友を呼ぶといつけど（つていうか友なのかな？）

僕の家はお金持ちなんかじゃないのいぢやないの。

「皆の衆一きいて驚けーついにー僕たんに春がきたー」

「へこひは」

翔子が田を見開く。

「やうやー僕たんに彼女ができるのさー」

マジでか。

ナルシストバカ  
南藤好男に先を越された・・・。

かなりショック・・・。

「で、今日集まつたのは、皆の衆にちやんちやんと彼女を見てもういたいからやー。」

南藤が「ホントわざとひしひしひへ軽く咳払いし、扉に手を遣つた。

「では、登場なのぞー。」

なんか、テレビ番組みたいだな。

扉がゆっくつ開く。

黒髪と少し紅色に染まつた色白の肌が遠慮がちにのぞく。

控え目にさりに佇んでくるのは、たたずみ。

紛れもないティスプレイヤーにひつっていた大和撫子だった。

「早川小毬です」

早川せんがにこつと可憐にしひしく笑つた。

## 南藤と早川さん。

「僕たんの赤いサファイア、小毬タンなのセー。」

それさつき聞いた。

あとタシソ付けるのヤメロ。

それから、一番シッコミたいのは

「赤いのはルビーだからな！サファイアは青」

そういうと南藤はふいと皿をそらした。

自分の非を認めろよ。

雅と翔子は早川さんと談笑している。

僕は、南藤と早川さんを見比べた。

このカップル、いつまでもつかねえ。

それより、南藤に先を越されたのがなによりショック。。。

「西山さん・・・ですよね、名前なんていうんですか？」

早川さんがにこっと天使のようだ僕に笑いかける。

「か、和也といこます」

あ、じゃった。

やつぱり、かわいいなあ。

## かえりみち。

「それじゃあね」

あのあと、空が暗くなる頃に、僕らはそれぞれの家路についた。

僕が帰り道、何気なく本屋に寄り道していなかつたら、早川さんの素顔を知ることができなかつただろう。

本屋の自動ドアが開くと、すこしひんやりした風が僕の頬を撫でた。

暦の上ではもう十月になろうとこいつのこ、まだ残暑が残つてゐる。このままじや、秋を越えてすぐになつてしまつだ。

漫画の長い棚を抜けないと雑誌コーナーにはつた。

びつしりと人が集まつてゐる。

奥のほうで見覚えのある制服がチラリと見えた。

もしかして

人と人のあいだをすり抜け。

そこで見たものは



別人。

『ヲトメ俱楽部』を読んでニヤけてる早川さんだつた。

『ヲトメ俱楽部』とは僕の母が愛読している雑誌だ。

「り ん」や「じゅ ぷ」のようにいくつかマンガが載つていて。

ただしB<sup>ボーカリスト</sup>の。

僕の両親はずつと前に説明したが、覚えていない人に説明しておぐ。

僕の母はA系 つまり、オタクである。

といつことは・・・

なぜ早川さんがそんな雑誌を讀んでいるのか、僕の脳は必死に考えた。

でも答えは一つしかない。

早川さんが母と同類であることである。

認めたくはないが。

僕は今、眼の前にいる早川さんと大和撫子な早川さんはとても同じ人とは思いがたかつた。



## 早川さんのトラウマ。

「あ

『アトメ俱乐部』を読んでいた早川さんの皿が一いつ瞬に向く。

あ、やべ。

慌てて皿を片づく。

て、いかなんで僕が慌てるんだ。

「また会いましたね・・・」

「あ、あははは」

・・・・・・・。

一人の間の『きこ』ちない沈黙に最近よく聞く女性アイドルグループの歌が流れる。

何を話したらいい?

どんな顔をしたらいいんだ?

早川さんも同じ気持ちのようだ、『気まずそうに笑みをはつづけて

僕から皿をそらす。

「・・・早川さん、もしかして・・・」

「やの先は言わないでっー！」

早川さんが甲高い叫びに似た声で僕の言葉を遮る。

「あ・・・。」めん

早川さんがぱつとした顔をして更に気まずがつむいた。

「い、いや。気にして」

「その事、絶対南藤くんには言わないくれない・・・？」

「へ、うん。でも、なんで？」

「アカウマなの・・・？」

「アカウマ・・・？」

モウダレモアイスコトハテキナイ。

「私、昔 中2の頃、好きな子がいたんですけど

早川さんは静かに語りだした。

\* \* \*

「ずっと好きだったのつー付き合ひで」

「まじで？いいよ。実はオレ、早川さんのこと、気になつてたんだよね」

その時は、あんなに辛い思いをするなんてしるよしもなかつた。

運命だと思つた。

クラス　いや学年でも女子に人気があるの人と付き合えるなんて、しかも！！

あの人も私のことが気になつてたなんてつ！

私は、有頂天で毎日学校へ通つた。

あの人に会うためだけに。

一人きりになると、『小毬』って優しく呼び捨てしてくれることも

あの温かく大きな手で包んでくれることも

たまにする照れ隠しあえも。

彼の声で「好き」つていつてくれただけで、私はとろけそうだった。

その人の何もかもが好きで、愛おしかった。

この人と結婚してもいいなんて思つたほど。

帰り道、狭い路地でこつそり甘く、くちづけしたことも鮮明に憶えている。

私が彼を愛すよつて、彼も私のことを愛してくれていたと思つ。

あの時までは。

放課後、私の家で談笑をしていた。

私がお茶のおかわりを持つてこよつとキッチンに行き、戻ってきたときのこと。

「小毬。なにこれ・・・?」

彼が、眉をひそめて先月号の『ヲトメ俱楽部』を私に見せる。

ベッドの下に隠していたのだが、もつと分かりにくいうつに隠せば良かつた……。

後悔した頃には遅かつた。

中身を見ていないことを、心から願つた。

「ま、マンガつ」

「・・・小毬つてオタクだつたの?」

バレてしまつた。

何よりも知られたくないことが、この人に。

「う、うん」

でも、私がオタクでもB-L好きでも、私の事好きでいてくれるよね。  
・・?

「オレ、オタクって大つきらいなんだよね・・・。じんましんがで  
るほど」

「え・・・?」

「別れよう。オレの知つてた小毬はお前じゃない」

ワカレヨウ・・・?

あなたの知つていた私つてダレなの  
? ?

海に沈んでいく気分だった。

なにも聞こえない。

なにも感じない。

彼が出ていくと、私の目から大量の涙が溢れ出した。

モウダレモアイサナイ。

モウダレモアイスコトハデキナイ。

それから私は一次元の住人となつた。

けど、人一倍臆病な私だから、外見だけは繕つて<sup>つく</sup>。

三次元の人間は怖い。

それに比べてマンガやアニメの一次元のキャラは私を裏切らない。

ずっと逃げないで永遠に私のそばにいる。

ずっと

。



## 決意

「それ以来男の子と話すのが怖くなつて」

知らなかつた。

早川さんがそんな思いをしてたなんて。

でも僕の口からは氣のきいたことも出なかつた。

「でもあの人ならなんか上手くやれる氣がして  
わないでほしいのっ！」

早川さんが手に持つている『アトメ俱楽部』を皺しわができるくらい握る。

そんな思いで南藤と付き合つたんだ・・・。

それなり

「うん。わかつた。絶対言わないから」

「ほんと?...」

早川さんの顔が一気に輝く。

「ありがとっ!」

ひつひつ早川さんがほほえむ。

・・・でも、南藤となら付き合へるつて思えるなんてやつぱつある意味尊敬する。

僕が女の子だつたら南藤なりせき合つたくないと思つと思つナビ・・・。

面倒臭そうぢ。

美夏も相当な物だけじ。

見つかった？！

「あ、小説タン……と西山和也……」

うわ。

現れやがった。

噂をすれば、だな。

つていうか早川さん手に『アメーテル俱乐部』 わたままだし……

あ、慌てて後ろに隠した。

「やあ小説タン。また会ったね」

「や、そうだねっ！」

「なんで一人が一緒になのさ？」

「ソレでまた会つたんだよ、ね？」

早川さんが僕に同意を求める。

「う、うん」

「あいや、『レクナのやつ』」

こいつの間にか早川さんの後ろに回っていた南藤が声を上げる。

うわ。

やべえ。

『アーティメ娛樂部』みつかるー！

## 南藤はオタク？

「雑誌！」

早川さんがどんな雑誌か悟られないようにアリーナラーメン部を抱きしめる。

「僕たん、それ読んだことあるのやー。」

え？

それどうこいつ意味？

「・・・え？」

早川さんと僕の頭上でいくつかのハテナが旋回する。

「僕の姉ねえさんが『これがあたしのバイブル』って勧めてきたのやー。」

ね、姉たん？

南藤の『たん』付けはなんとかならんのか。

つていうかバイブルって何だ。

「ば、ばいぶる？ なにそれ

「僕たんにもわからないさ！ けど『コトメ俱楽部』がおもしろいのは確かさ！ 特に『恋の乱れ咲き』は最高だねー。」

「そりだよねっ！・・・あっ

早川さんが慌てて口を抑える。

「小穂たんもファンなのか？」

「う、うん

「僕もー。」

え？

南藤もオタクだったの？

全くついていけない。

小一時間、一人でオタク談議をしている。

あのマンガどうとか、このマンガはオススメとかまったくついていけない。

でも、なんとなく両親の過去を見ているようだった。

この一人を両親のところに連れてていけば、

仕舞いにはオタク同盟を結んでしまっていいそうだ。

「ほ、僕もつかえつていい？」

「いいやー西山たんも談議に付き合つのさー全世界はオタクについて悪い印象を持ちすぎるーこれは真剣に考えなければならないー！」

ついに僕も『たん』付けですか・・・。

格上げなのか格下げなのか。

つていうか、お前は自分の学力について考える。

本当、受験ヤバくねえか。

あと四、五ヶ月だぞ。

「だいたいオタクというだけで、その人のすべてが、分かるというわけじゃないのに、なんで敬遠されるんだ！」

そんなこと僕に言われても困る……。

「そうだそうだ

早川さん、相槌あいだち打つてるし……。

つていうかいい加減帰らせてくれ。

## 美夏からの電話。

ようやく一人の呪縛じゅばくから逃れた僕は疲れきっていた。

なんなんだ、あの一人は。

ハンパねえ。

自分の部屋に入ると、ベッドに飛びつき、そのまま熟睡じゅくすい。

「カズうー、電話あ」

母が寝てこる僕の肩を揺すぶる。

「んあー もうひよつと・・・あとじゅつぶ・・・ん・・・NNN」

「美夏ちゃんていう女の子から。声は真凛ちゃん並みに可愛いよ。でなくていいのね?」

「美夏ー?..」

一気に目が覚めた。

「辛い」と含み笑こする。

「でるのね?」

母がにやつと含み笑こする。

それを無視して電話器を取つた。

「代わつたけど・・・もしもし？美夏？」

「寝てたの？」

「まあね。ちよつと疲れてたから」

声と手が震える・・・。

美夏にはわかりませんよ！」

「それより、珍しいね。そっちから電話かけてくるなんて」

「・・・翔子ちゃんと別れたんだってね」

「よくしつてんね」

「結構有名だよ。私のクラスでも」

「マジですか。・・・勉強どう?はかざつてる?」

「まちまちね

「やうなんだ」

会話がぶつんと途切れる。

何を話したらいいんだ  
！？

「なにか用事があんの？」

美夏がこんな話をするがために電話するとは思えない。

「なんもないよ」

「本当だ？」

「なんとなく・・・声が聴きたかったの・・・」

今なんて言ったんだ？『なんとなく』から聞き取れなかつた。

「『ermen。声が小さくて聞こえなかつたんだけど』

「なんでもないっ！..」

「やう言われたら、なんか気になる」

「細かい」と気にするなつーじゃ、今から英会話スクールあるから  
切るー！」

「えつ。ちゅつ」

プーフーーーーーーー。

なんのためにあいつは電話してきたんだ？

僕は耳に受話器を当てたまま、首をかしげた。



WHY?

美夏から電話があつた次の日、僕はある噂を耳にした。

「ねえ、きこた?」

「え、なになに?」

「軽山田さんと鷺山くん、別れたんだって!」

「マジでーー!」

「マジマジ。二日酔いのことで、軽山田さんがつたんだってさあ

どうこうひと・・・?

それってもしかして昨日美夏が電話してきたのと意味があるのか

?

女子たちはまだ喋っていたが何も聞こえなかつた。

なんで?

びひつて?

疑問が次々と浮かび上がる。

でも、美夏を田の前にしてそんなこと聞きにくい。

帰つたら電話して、美夏にきこひ。

C a l l i n g y o u .

プルルルル・・・プルルルル

電話の呼出音が鳴る。

美夏早くでないかなあ。

「はい、軽山田で」やれこますが

電話に出たのは年の取った女性だった。

もしかしたら使用人の女性かもしれない。

「美夏さんに、かわつてもらいたいのですが

「かしこまりました。少しお待ちください」

ああ～・・・緊張する。

)

保留音が切れて美夏の声が聞こえた。

「はい、カズ？」

「へ、ひひひひひ」

「うん」と言おうとしたのだが・・・。

緊張はピークに達していた。

「なににつながってるの？」

美夏の好きな人。

「け、慶太郎と別れたってホント?」

僕がそう聞くと、美夏の声が急に冷たくなった。

「そうだけど。それが何?」

「何つて訊かれても・・・」

「用がないんならもう切るよ」

「ちょっ、待つて」

「もう、なんなわけ?」

「なんで別れたの?」

これが僕が一番聞きたかったこと。

「・・・好きな人ができるの つていうか、付き合う前からいた  
の」

それは誰なのか?

すぐ気になつたが、僕じゃないに決まつてる。

だから聞くのが怖かつたんだ。

「じやあね

「えつ

ブーブーブー・・・

僕は受話器を置いてしゃがみこんで、やるせなさこため息をついた。

## のどかな昼休み。

「あれ、南藤は？」

それはのどかな昼休みのこと、僕はいつもより教室が静かなことに気付いた。

「ああ？あの彼女のところやつさん？」

雅が卵焼きを頬張りながら、興味無む気に応える。

「つましくってんだ」

「意外にね」

翔子が横から口を挟んだ。

「最初はすぐ破局するって思つたけどなあ……」

雅がしみじみとつぶやいて窓の外へ視線を遣つた。

「わいも彼女欲しいわ~」

雅がちらりと翔子を見る。

翔子はそれを無視して、僕に質問を投げかけた。

「ダーリン……じゃなくてカズはどうなの？」



## のぶかな昼夜み。（後書き）

久しぶりに更新しました…。

すっかり内容を忘れていたので、この96話を書くのに一話から読み直して、設定とか頭に入れてだいぶ苦労しましたが、これからはちよつとずつ更新していくつもりです。

あとちよつとで終わるのでそれまで頑張ります　＝　＝　＝　川

願い。

「…なにが？」

翔子の質問の意味がわからず、聞き返す。

「なにが？じゃなくて、美夏ちゃんとのことよ！」

翔子が僕に詰め寄る。

「えつと…」

「美夏ちゃん、慶太郎くんと別れたんだってね。それってカズが関わってんの？」

「いや、それは別に…」

翔子のすゞい剣幕に圧倒される僕。

「じゃあ、なんで？！」

「…好きな人がいる…って」

翔子はその途端、はっと息を飲んで黙りこんでうつむいた。

「告白は…？したの？」

「一応」

「一応?」

僕の答えに翔子が眉根を寄せた。

「でも、無理つて」

「それって美夏ちゃんが付き合つてる時でしょ?」

「うん...」

頷く僕。

「もつー回告白してみたら? 心が変わつてるかも...」

「無駄だよ」

「.....なんで?」

翔子がわけがわからないという様に僕を見る。

「だつてアイツ...アメリカ行くし」

翔子が驚いたように一瞬、目を開く。

「 んなの関係ないじゃん! カズは美夏ちゃんのことが好きじゃないの? 好きならそんなこと関係なくない?...」

「なんで、翔子がそんなに感情的になんだよー」

翔子の声につられて僕の声もだんだん大きくなつていぐ。

「カズと美夏ちゃんが幸せになつてもいいたいからに決まつてるで  
しょっ……」

そのまま翔子の皿には溢れそつなほどの涙が溜まつていた。

その姿を見て、すこし冷静になる。

「…………」めん

「……つ。幸せになつてよ……お願ひ」

翔子は涙を流して僕にそつ頼んだ。

僕はそれをただ見つめる」としか出来なかつた。

## 絡まつた糸。

カズは美夏ちゃんのことが好きじゃないの？

五時間目の授業中、僕はさつきの翔子の言葉を反芻<sup>はんすう</sup>していた。

美夏のことは…好きだよ。

色々あつたけど、やつぱり今でも好きな事は変わらない。

ずっと一緒にいたいし、慶太郎と別れたって聞いたときはちょっと嬉しかったっていうか…なんかほっとした。

だからこそ、美夏にはアメリカに行つて欲しくない。

けどアメリカに行つても行かなくても、美夏と僕が離れ離れになるのは必然といつてもいい。

学力に差がありすぎるから、もし美夏が日本の高校へ行つたとしても、僕はその高校へ入学することはできないだろう。

けれど、美夏が日本にいてくれれば、道でバッタリと会えるかもしれないし、美夏にも会おうと思つたら会える。

“どうしたらいいんだ、僕は。

この想いをどうしたら……？

絡まつた糸をほぐしてこるときのよう、いらっしゃり仕方がない。

……美夏に会いたい、今すぐ。

どうなるかわからないけど、どうなつたっていい。

もう絶対自分の想いに、田をそられない。

## 伝えたいこと。

五時間目のチャイムが鳴り終わると同時に、僕は立ち上がりて教室を出た。

早く伝えたい　　その思いだけが僕を突き動かす。

僕は人の間を縫つて美夏のいる教室へ足を進めた。

すれ違う人の中で、一瞬だが美夏が見えた。

友達と思われる人と楽しそうに喋っている。

僕はぐくっと唾を飲んで、美夏に近づいた。

「み、美夏！」

情けないほど声が震える。

立つてられないほど膝が笑う。

けど、やっぱり美夏が好きだから……

伝え  
たい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3164k/>

---

最強彼女

2011年11月20日02時12分発行